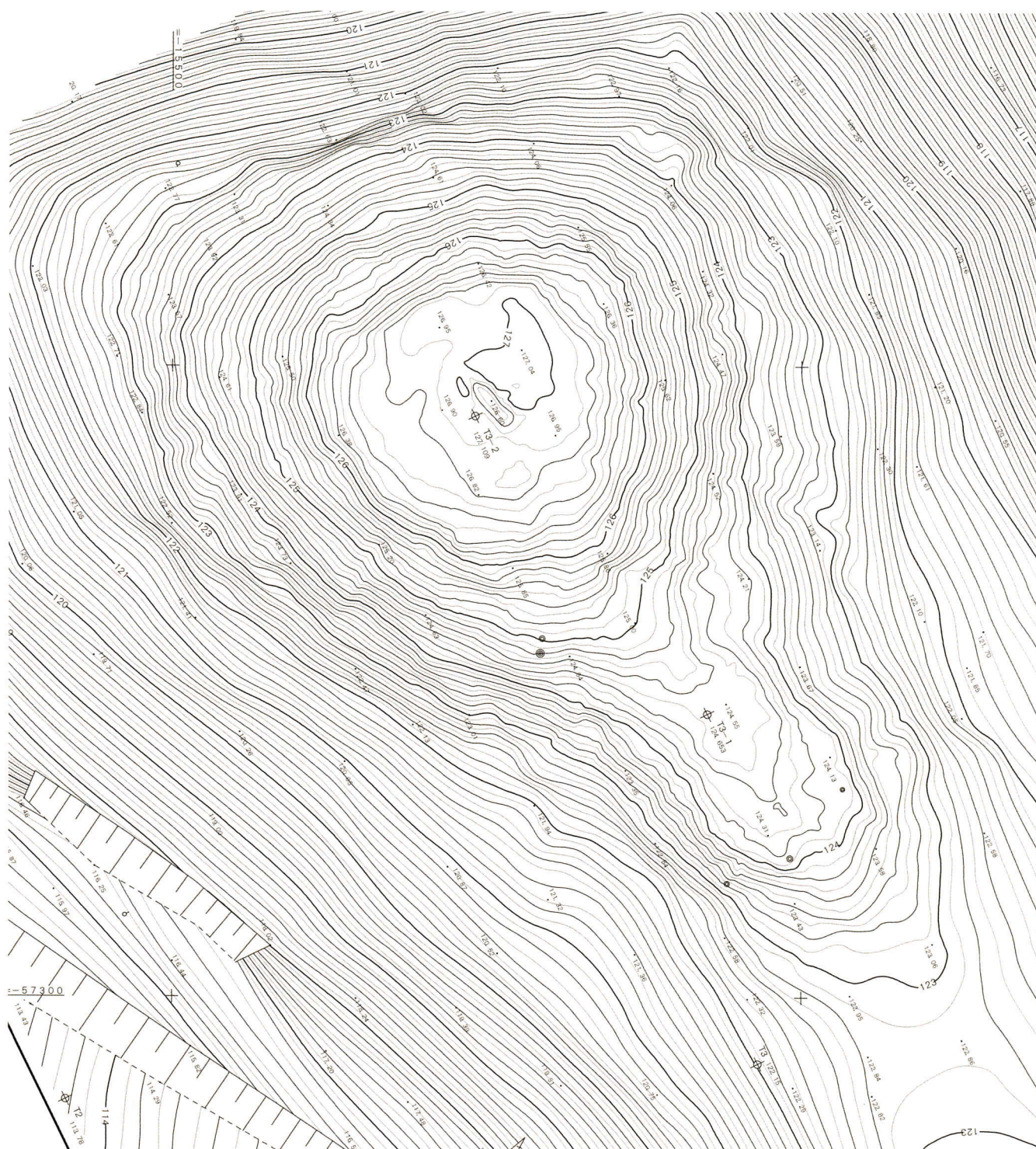


# 夕田墳墓群総括報告書 2 (分析編)



2021

岐阜県加茂郡富加町教育委員会



## 例 言

1. 本書は富加町教育委員会が平成 28（2018）年度に実施した杉洞 1 号墳及び平成 29（2019）年度実施の蓮野 1・2 号墳と共に、平成 21～24 年度に実施した夕田茶白山古墳（平成 25 年報告書刊行）を含めて「夕田墳墓群」と位置づけて検討を加えた総括報告書の第 2 分冊である。
2. 当事業は、国庫補助金の交付を受けて実施した。
3. 当事業は、岐阜県教育委員会及び夕田地区古墳群調査検討委員会の指導のもと、富加町教育委員会が実施した。
4. 調査の体制は以下の通りで実施した。

調査主体 富加町教育委員会

夕田地区古墳群調査検討委員会

委員長 広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）  
早川 万年（岐阜県文化財保護審議会委員、元岐阜大学教育学部教授）  
赤塚 次郎（古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長）  
吉川 真司（京都大学大学院教授）  
村井 正覚（富加町文化財審議会委員）平成 28・29・30 年度  
高垣 浩規（富加町文化財審議会委員）  
織部 博夫（富加町文化財審議会委員）平成 28 年度  
柴田 典子（富加町文化財審議会委員）平成 29 年度～  
中川 豊（富加町文化財審議会委員）令和元年度～  
粥川 友和（富加町教育委員会教育長）  
オブザーバー 松野 晶信（岐阜県教育委員会社会教育文化課）平成 28 年度  
小野木 学（岐阜県環境部文化伝承課）平成 29・30 年度  
小林 新平（岐阜県環境部文化伝承課）令和元年度～

富加町教育委員会事務局

教育課長 河合 康広（平成 28 年度）  
澤野 利博（平成 29 年度～令和元年度）  
日比野昌弘（令和 2 年度）  
教育係長 日比野昌弘（平成 28・29 年度）  
島田 崇正（平成 30 年度～令和元年度）  
井戸 通則（令和 2 年度）  
調査担当 島田 崇正（平成 28・29 年度、令和 2 年度は事務併任）  
事務担当 山内 正明（平成 30 年度・令和元年度）  
調査補助員 井上 晶子

5. 蓮野 1 号墳の土壤炭化物年代測定は名古屋大学宇宙地球環境研究所と令和元年 10 月 1 日付けで「岐阜県加茂郡富加町夕田地区における夕田墳墓群での年代測定に関する協定」を締結して実施した。分析は同研究所の北村浩之教授にご担当していただいた。
6. 本書の第 1 章 5 を北川浩之(名古屋大学宇宙地球環境研究所)が、それ以外を島田崇正が執筆した。
7. 挿図・表は各章ごとに通番とし、註も各章ごとに文末に付した。
8. 本書の編集は島田崇正が担当した。

# 目 次

## 第1章 蓮野1号墳土壤炭化物年代測定

1 目的とねらい	1
2 第1次土壤サンプル採取と年代測定の結果	1
3 第2次土壤サンプル採取に至る経緯	5
4 第2次土壤サンプルの採取方法	6
5 蓮野1号墳 土壤試料の炭素14年代測定	11

## 第2章 美濃の古墳出現期の様相と夕田墳墓群の位置づけ

1 はじめに	19
2 夕田墳墓群の概要	20
3 富加町における当該期の遺跡分布と消長	24
4 中濃地域の遺跡分布と消長	26
5 美濃の首長墓の様相と夕田墳墓群の位置付け	29
6 夕田墳墓群の系譜について	40
7 弥生時代終末期の盛土によって墳丘を構築する墳墓について	42
8 まとめ	44

# 図 表

### 〈第1章〉

図1-1 蓮野1号墳第1次(平成30年5月)土壤サンプル採取地点	2
図1-2 蓮野1号墳第2次(令和元年11月28日)土壤サンプル採取地点	7
図1-3 土壤サンプル状況1	8
図1-4 土壤サンプル状況2	9
図1-5 土壤サンプル状況3	10
図1-6 重液(STP溶液)を使った鉍物粒子と微小炭化物の分離	13
図1-7 微小炭化物と微小植物片(毛細根など)の分離	13
図1-8 蓮野1号墳の黒色土状から分離された微小炭化物の顕微鏡写真	14
図1-9 蓮野1号墳の黒色土壤の炭素14年代測定結果から推定される暦年代(2 $\sigma$ 範囲)	14
図1-10 黒色土壤から分離した微小炭化物8つの測定結果を用いて推定された蓮野1号墳の造成年代	15
表1-1 第1次採取資料 測定資料の詳細と処理方法	3
表1-2 蓮野1号墳第1次採取サンプルの放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	4
表1-3 蓮野1号墳第2次土壤サンプル一覧	6
表1-4 測定結果リスト	16

〈第2章〉

図 2-1	夕田墳墓群 現況地形測量図 (S = 1/2500) .....	21
図 2-2	夕田墳墓群位置図 (S = 1/5000) .....	22
図 2-3	富加町の弥生時代中期～終末期遺跡分布 .....	25
図 2-4	東山浦遺跡 HY2004-21T 調査状況 .....	25
図 2-5	中濃 (木曾川左岸含む) の集落遺跡分布 .....	27
図 2-6	美濃の弥生時代後期後半～古墳時代前期の墳墓編年図 .....	30
図 2-7	美濃の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の主な墳墓位置図 .....	30
図 2-8	美濃の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の B 2 類 (丘陵上独立墳) の分布 .....	35
図 2-9	弥生時代終末期～古墳時代初頭の鉄器出土墳墓の分布 .....	35
図 2-10	弥生時代終末期～古墳時代初頭の墳墓出土鉄器 (S = 1/6) .....	36
図 2-11	刃関双孔鉄剣の出土地 .....	37
図 2-12	円形周溝墓と瀬戸内系埋葬施設の波及経路 .....	37
図 2-13	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の美濃の墳墓編年と各地の対応表 .....	39
図 2-14	弥生時代後期後半～終末期 (1・2 段階) の大型円形墳・突出部付円形墳の分布 .....	39
図 2-15	弥生時代後期後半～終末期 (2・3 段階) の主な前方後円形墳墓の分布 .....	39
図 2-16	美濃の円形墳及び突出部付円形墳 (S = 1/500) .....	41
表 2-1	時期区分対応表 .....	19
表 2-2	夕田墳墓群の概要 .....	20
表 2-3	中濃 (木曾川左岸含む) の集落遺跡消長表 .....	27
表 2-4	美濃における古墳出現期の墳墓 .....	33
表 2-5	墳墓の属性分類 .....	34
表 2-6	美濃の盛土による高塚系墳丘墓 .....	43

## 総括報告書 1 目次

第 1 章	遺跡の位置と環境	第 5 章	蓮野 1・2 号墳の調査
第 2 章	夕田墳墓群の既往の調査	1	現況測量調査の成果
1	夕田茶臼山古墳の調査の経過	2	調査方法
2	夕田茶臼山古墳の調査の成果	3	基本層序
第 3 章	調査の目的と経過	4	各トレンチの成果
第 4 章	杉洞 1 号墳の調査	5	小結
1	現況測量調査の成果	第 6 章	属性の整理と比較
2	調査方法		
3	基本層序		
4	各トレンチの成果		

## 第1章 蓮野1号墳土壌炭化物年代測定

### 1 目的とねらい

蓮野1号墳は、平成29年度に実施した範囲確認調査において突出部に設けた3トレンチ（以下T3とする）の最下層にて出土した器台が墳丘に伴うものかどうか、墳墓の築造年代を決定する上で重要な課題であった。考古学的には、前年の平成28年度に調査した近接する杉洞1号墳においても突出部盛土の基底部分において高坏が出土している点や、器台が包含される竪穴状遺構西側と南側の立ち上がりにおいて墳丘盛土の土塊の積み初めとほぼ合致する点などを評価して（註1）、竪穴状遺構が墳丘築造に関連する遺構の可能性を想定した。土壌炭化物の年代測定が困難である点は承知しているが上記の点を自然化学分析から検証することを目的として実施した。

サンプルについては、T3の86層、T1の北壁19層上面と東壁68層上面（19層と同一層）の黒色土を対象とした。同層はほぼ同質で同一の層順と考えられ、当該黒色土には炭化物が多く含まれている。86層下部では縄文時代の局部磨製石鏃が出土しているが、その下層87層では弥生時代終末期の器台が出土していることから、86層土は盛土か少なくとも移動した土である可能性が高いと認定した。ただし、87層の器台が86層上面から掘り込まれ埋納された可能性を考え86層を旧地表とする見解も指摘されている（註2）。仮に後者であるとしても墳墓築造時の地表であり、盛土と考えても当時の地表土を移したものと想定されるので、これに含まれる炭化物の年代分析を実施して検討することとした。

まず2箇所のサンプルを採取することとし、サンプル採取と年代測定を（株）パレオラボに委託した。平成30年5月15日に文化庁の立ち会いの下で、（株）パレオラボによる土壌サンプルの採取（2箇所）を実施した。



第1次土壌サンプル採取の風景

### 2 第1次土壌サンプル採取と年代測定の結果

土壌サンプルの採取箇所は図1-1のとおりで、採取はトレンチ断面からおこなった。T1北壁の19層上面をサンプルA、T3北壁の断面から86層の上面の土をサンプルBとし、採取時に土層面を削りフレッシュな面を出してから採取した。それ以後の作業は、以下のとおりである。ここでは（株）パレオラボAMS年代測定グループの報告書を掲載する。なお、分析を実施した平成30年時点では $^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正には較正曲線データ：IntCal13を使用しているが、令和2年にIntCal20の較正曲線データが発表されたため、令和2年9月8日に再較正を実施していただき、そのデータを掲載している。



T1サンプル採取後の様子



図1-1 蓮野1号墳第1次(平成30年5月)土壤サンプル採取地点



**試料と方法** T1 および T3 において採取した土壌を水洗選別して得られた炭化物の2試料である。これらの炭化物は、草本あるいは木本の一部からなる混合物である〔表1-1〕。

各試料は、化学処理およびグラファイト化を行った後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
サンプルA PLD-36426	調査区：1トレンチ（T1） 層位：19層	種類：炭化物（木材・草本混合物） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
サンプルB PLD-36427	調査区：3トレンチ（T3） 層位：86層	種類：炭化物（木材・草本混合物） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表1-1 第1次採取資料 測定試料の詳細と処理方法

**結果** 表1-2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730 $\pm$ 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13 ※令和2年にIntCal20の較正曲線データが発表されたため、再較正を実施）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（以上、（株）パレオラボ AMS年代測定グループ）

**考察と課題** パレオラボの報告を踏まえて、若干の考察を付す。

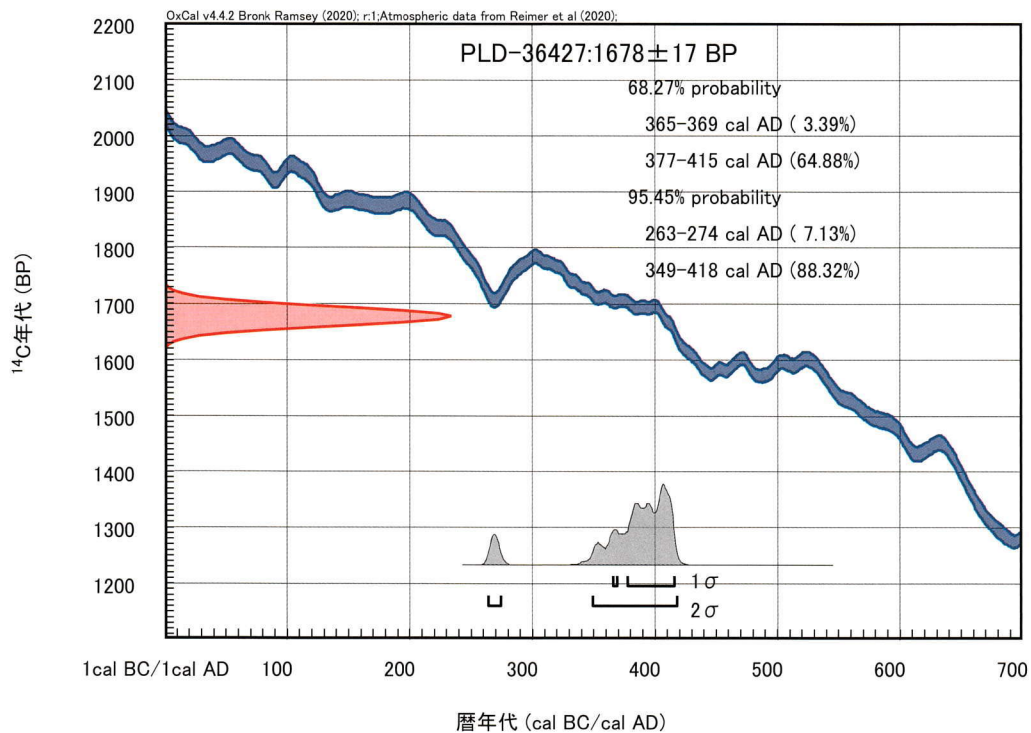
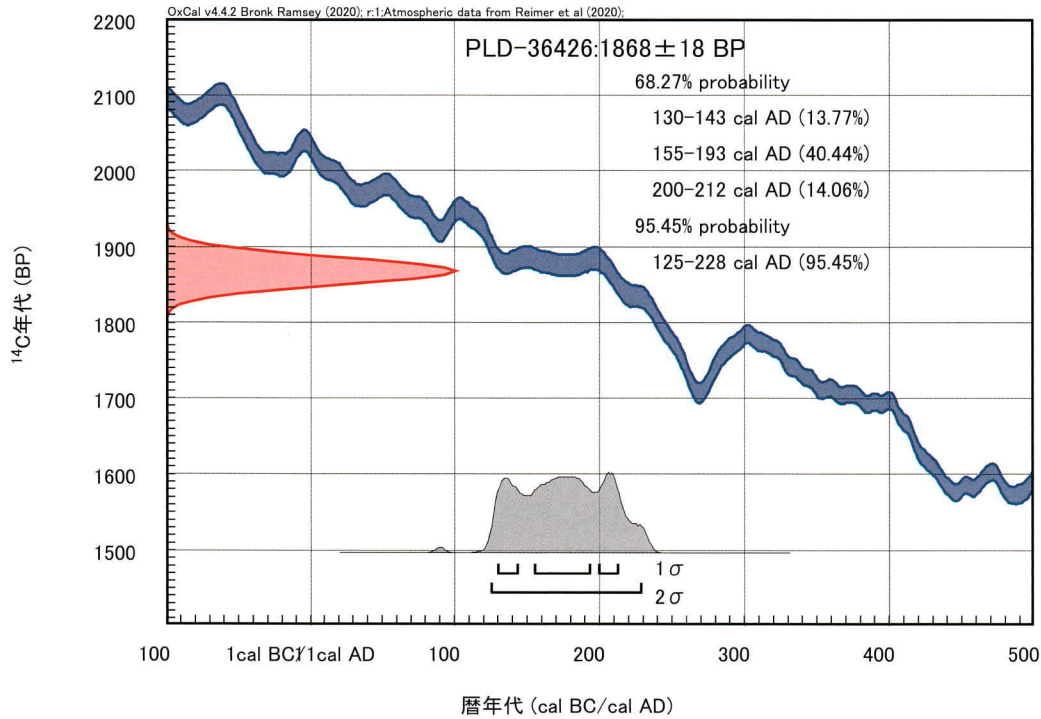
サンプルAのT1 19層土壌層中炭化物は、 $2\sigma$ 暦年代範囲において125-228 cal AD（95.45%）の暦年代を示し、器台の年代観を含む値である。

サンプルBのT3 86層土壌層中炭化物は、 $2\sigma$ 暦年代範囲において263-274 cal AD（7.13%）、349-418 cal AD（88.32%）の暦年代を示した。

2つのサンプルの年代値が異なることと、年代幅が2世紀第2四半期～5世紀第1四半期という非常

表1-2 蓮野1号墳第1次採取サンプルの放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta$ 13C (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm$ 1 $\sigma$ )	<sup>14</sup> C 年代 (yrBP $\pm$ 1 $\sigma$ )	<sup>14</sup> C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
サンプルA PLD-36426	-25.00 $\pm$ 0.10	1868 $\pm$ 18	1870 $\pm$ 20	130-143 cal AD (13.77%) 155-193 cal AD (40.44%) 200-212 cal AD (14.06%)	125-228 cal AD (95.45%)
サンプルB PLD-36427	-26.13 $\pm$ 0.11	1678 $\pm$ 17	1680 $\pm$ 15	365-369 cal AD ( 3.39%) 377-415 cal AD (64.88%)	263-274 cal AD ( 7.13%) 349-418 cal AD (88.32%)



に広がったことで、2つの炭化物試料から築造年代を絞ることが難しくなった。サンプルAは墳丘下1.8 mであるが、サンプルBは墳端に近い部分で地表まで0.8 mで、なおかつ上部に根攪乱があり二次的な影響を受けやすい。サンプルの質的問題が大きかった可能性も考えられた。

**第3回調査検討委員会の開催** 平成30年11月30日に調査検討委員会を開催し上記の炭化物AMS年代測定の結果と考古学的な調査所見について協議いただいた。

今までの発掘調査成果のまとめと考古学所見についてや墳墓の所属時期等についての調査所見を確認いただくなかで、土壌炭化物AMS年代測定2点から得られた年代幅が広く、今までの発掘調査成果と直接結び付かない点について課題が示され、もう少しサンプル数を増やさねば検討できないのではないかとの意見が提示された。また炭化物の抽出が難しい場合などもあり、現場や資料の状況に合わせた分析方法を検討しておこなっていく必要があり、大学等の研究機関への相談と共同研究の打診をはかるよう助言をいただいた。これにより年代測定については事業を1年延長し総括報告書2に所載することとなった。



### 3 第2次土壌サンプル採取に至る経緯

第3回調査検討委員会の指摘を受けて、名古屋大学宇宙地球環境研究所へ共同研究の打診をおこなった。令和元年5月16日に北川浩之氏（名古屋大学宇宙地球環境研究所教授）の研究室にて事前検討をおこない、今までの経緯と出てきた課題を説明した。北川氏からは純粋な築造当時の炭化物を取り出すのは容易ではないこと、土壌サンプルには様々な経緯と経過を経た炭化物が含まれるためイレギュラーな数値は出てくるので、第1次の採取はサンプル数が少なすぎるとの指摘を受けた。今後の実調査はできるだけサンプル数を増やし、数値の重なるの多い部分を検討していくことを方針とし、令和元年10月1日付けで「岐阜県加茂郡富加町夕田地区における夕田墳墓群での年代測定に関する協定」を締結した。

さて、蓮野1号墳の突出部は土塊が用いられており、そこには当時の地表土と考えられる黒色土が残存した。当該黒色土の上面は光沢のある黒褐色を呈しており、土塊を採取する前に野焼きをおこなっている可能性が想定される。実際に土塊採取の実験をおこなった際にもっとも手を焼いたのが根の切断であった。この点は野焼きで地表付近の根を炭化させることでかなりスムーズな作業になったのではないかと考えている。

以上の想定から、土塊表面（黒色土）の炭化物の採取を中心に据えて年代測定をおこなうことで、築造年代に近い数値が得



られるのではないかと考えた。また補足的に発掘調査にて点上げした86層・87層出土の炭化物についても年代分析を実施した。

計2回実施した炭化物AMS年代測定を区別するため、平成30年度に実施したものを第1次土壌サンプルAMS年代測定、令和元・2年に実施したものを第2次土壌サンプルAMS年代測定とした。

#### 4 第2次土壌サンプルの採取方法

令和元年11月28日に名古屋大学宇宙地球環境研究所北川浩之教授と富加町教育委員会島田により土壌サンプルの採取を実施した。

蓮野1号墳のトレンチは平成30年5月に土嚢にて一旦埋め戻していたため、前日にT1・T3の土嚢除去をおこなった。その後、壁面を3cm程度削ってフレッシュな面を出し、黒褐色土が比較的是っきり

りとしている土層に調査時の土層番号を付しておき、当日は現場で土層の状態を確認しながら採取する層を選定した。

黒色土の掻き取りは市販の移植ごてを使用し、掻き取った土を土層番号の紙とともにチャック付ビニール袋に入れ、タッパーに保管した。タッパーには1から順に番号つけ、試料番号とした。

ひとつの試料の採取が終わるごとに、移植ごて等の掻き取りの道具を水で洗浄して混入を防いだ。

試料番号	採取箇所	層位	サンプル番号	採取日
1	1 トレンチ北壁	1層	HN1-1	2019.11.28
2		2層	HN1-2	2019.11.28
3		5層	HN1-5	2019.11.28
4		7層	HN1-7	2019.11.28
5		3層	HN1-3	2019.11.28
6		4層	HN1-4	2019.11.28
7		6層	HN1-6	2019.11.28
8		8層	HN1-8	2019.11.28
9		10層	HN1-10	2019.11.28
10		11層	HN1-11	2019.11.28
11		12層	HN1-12	2019.11.28
12		13層	HN1-13	2019.11.28
13		19層	HN1-19	2019.11.28
14		20層	HN1-20	2019.11.28
15	1 トレンチ東壁	61層	HN1-61	2019.11.28
16		61'層	HN1-61'	2019.11.28
17		65層	HN1-65	2019.11.28
18		69層	HN1-69	2019.11.28
19		68層	HN1-68	2019.11.28
20	3 トレンチ東壁	E層	HN3- E	2019.11.28
21		D層	HN3- D	2019.11.28
22		C層	HN3- C	2019.11.28
23		B層	HN3- B	2019.11.28
24		A層	HN3- A	2019.11.28
25	3 トレンチ南壁	86層	HN3-86	2019.11.28
26		81層	HN3-81	2019.11.28
27		82層	HN3-82	2019.11.28
28		58層	HN3-58	2019.11.28
29		54層	HN3-54	2019.11.28
30		10層	HN3-10	2017.12.26

表 1-3 蓮野1号墳第2次土壌サンプル一覧

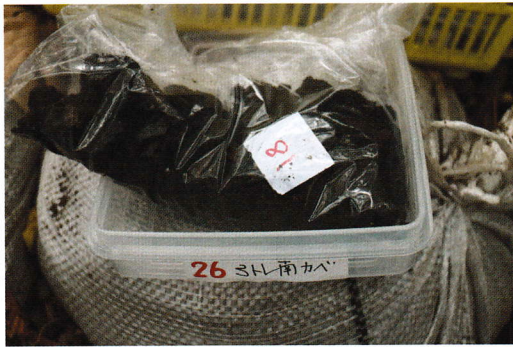




土層の状況確認



土壌サンプル採取状況



土壌サンプルのラベリングと保管



土層サンプル採取後の状況

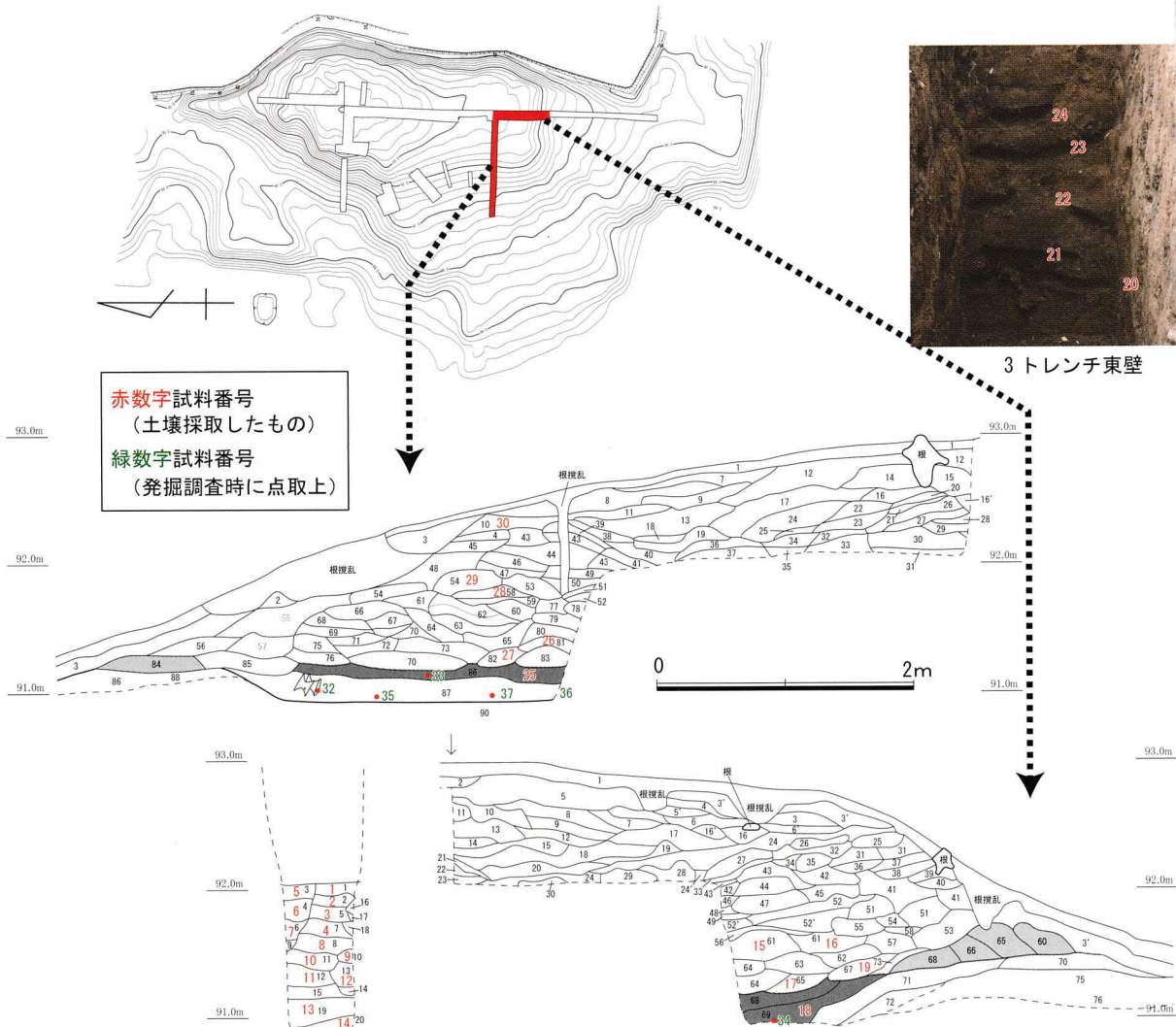
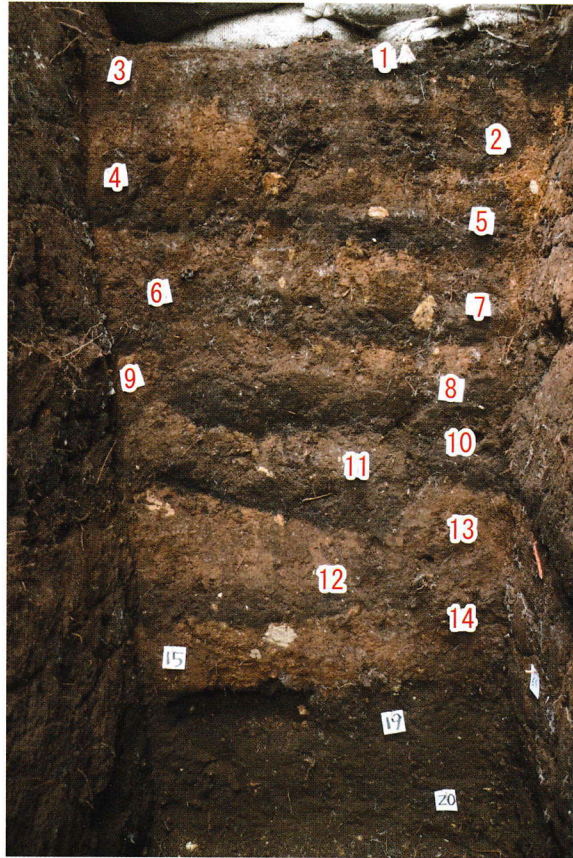


図1-2 蓮野1号墳第2次(令和元年11月28日)土壌サンプル採取地点



T1 北壁



T3 東壁

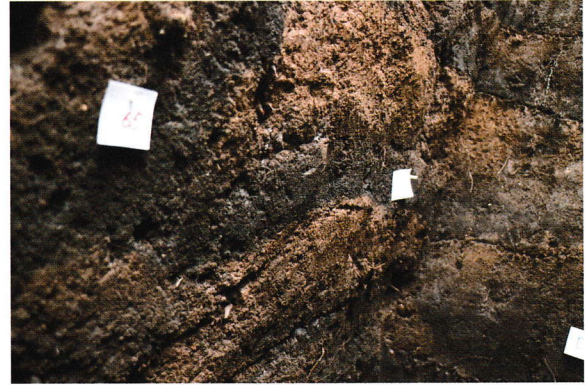


T1 東壁

図1-3 土壤サンプル状況1



試料 15 (61 層)



試料 26 (81 層)



試料 27 (82 層)



試料 28 (58 層)



試料 30 (10 層)



試料 29 (54 層)

図 1-4 土壌サンプル状況 2



T1 北壁



T3 東壁



T1 北・東壁

図1-5 土壤サンプル採取後の状況



## 5 蓮野 1 号墳 土壤試料の炭素 14 年代測定

### 1) 概要

蓮野 1 号墳の黒色土壌層（微小な炭片の含有層）から採集された植物片（炭化物を含む）及び微小な炭化物の加速器質量分析法（AMS 法）による炭素 14 年代測定を行った。土壤試料から肉眼で確認できる比較的大きな小枝、木片、種子などの植物片の炭素 14 年代測定を行った結果、大半の植物片は蓮野 1 号墳の造成年代と関係しない現代あるいは蓮野 1 号墳の構築後に混入したものであった。蓮野 1 号墳の造成年代と関係すると考えられる炭化物（種子・木材）の年代は、1～3 世紀であり、古墳時代の初期あるいはそれより若干過去にさかのぼる。また、蓮野 1 号墳の黒色土壌に含まれている微小炭化物を重液分離して、炭素 14 年代測定を行った。比重の異なる重液（ポリタングステン酸ナトリウム水溶液。一般的には「SPT 溶液」と呼ばれる。）を用い黒色土壌に含まれる微小炭化物を分離した。その炭素 14 年代測定の結果、蓮野 1 号墳の造成年代を示すと解釈される 1 世紀末～2 世紀末の年代が得られた。また、8 つの土壤試料から分離した微小炭片の炭素 14 年代測定の結果には統計的に有意な違いが認められなく、蓮野 1 号墳の造成年代を示していると考えられる。

### 2) 試料と方法

令和元年 11 月 28 日に蓮野 1 号墳において、1 トレンチ北壁から 14 試料、1 トレンチ東壁から 5 試料、3 トレンチ東壁から 5 試料、3 トレンチ南壁から 6 試料が採集された（表 1-4 の試料番号 1～30）。また、以前の発掘調査（2017 年 12 月）で採集された 7 試料（表 1-4 の試料番号 31～37）の土壤・炭化物を炭素 14 年代測定の対象とした。

#### 2.1 植物遺体

土壤試料を風乾させた後、根・毛根・礫などを取り除き、小枝、木片、種子などの植物片を拾い出した。一部の植物片（主に木材）は炭化していた。植物片・炭化物は、埋没中に混入した二次的な炭素を除くために、酸・アルカリ・酸処理（AAA 処理）を行った。

#### 2.2 微小炭片

蓮野 1 号墳の盛土には、造成時に埋没した植物片がほとんど含まれていなかった。土壤試料に含まれる有機物の大部分は現代の植物（二次的な混入物）であった。この点から墳丘の盛土には、後世の様々な有機物の混入があることが分かる。また、黒色土壌試料には、サイズが～数百マイクロメートルの微小炭化物が含まれていることが分かった。この微小炭化物は、墳丘の造成に用いられた土壤に含まれていたもので、旧地表の草本植物を焼き払った際に生成されたものの可能性が高いと推定される。蓮野 1 号墳の造成年代を決定する有効な試料となる可能性がある。

土壤中の微小炭化物の分離のガイドラインは存在していない。本分析では、土壤中の微小炭化物の分離法として重液分離法を採用した。土壤試料から根や比較的大きな有機物や礫・砂を除去した後、比重の異なる複数の重液（ポリタングステン酸ナトリウム。一般的には「SPT 溶液」と呼ばれる。）を調整し、

炭化物と鉱物粒子（図1-6）、炭化物と有機物（毛細根など）の分離を行った。乾燥重量20グラムの黒色土壌試料から、2～3mgの微小炭化物が分離された。顕微鏡観察を行い毛細根などが分離した微小炭化物に含まれていないことを確認後、AAA処理を行った（図1-8）。炭化物以外の有機物が含まれている場合は、再度、重液分離を行った。

### 2.3 AMS測定

約3mgの植物遺体・微小炭化物を燃焼して二酸化炭素を発生、鉄触媒を用いた水素還元法で二酸化炭素をグラファイト（固体炭素）に還元し、名古屋大学宇宙地球環境研究所のタンデトロン加速器質量分析装置（High Voltage Engineering社製 Tandetron、Model 4130 AMS）を用いて炭素14測定した。炭素14年代は、炭素14年代校正データセット（IntCal20）及び炭素14年代解析ソフトウェア OxCal4.4を用い暦年代に校正した。なお、炭素14年代測定の誤差は、試料の測定と同時に測定した複数個の標準試料およびブランク試料の測定値のバラツキを考慮して算出している。

## 3. 結果・考察

付表〔表1-4〕に測定結果をまとめた。蓮野1号墳の造成年代とは明らかに関係しない結果を除いた炭素14年代の校正年代の確率分布を図1-9に示す。蓮野1号墳の炭素14年代は、1世紀から2世紀に集中し、その幅に構築年代が収まる可能性が高い。

トレンチ1（T1）及びトレンチ3（T3）の第1次土壌サンプル採取で得られた炭片の炭素14年代測定結果が報告されている。株式会社パレオ・ラボで行われたT1の炭素14年代は $1870 \pm 20$  BP（PLD-36426）であり、その校正年代はAD130-AD144、AD155 - AD211（68.3%の信頼限界）である。T3の炭素14年代は $1678 \pm 17$  BP（PLD-36427）であり、その校正年代はAD 375-416と若干新しい年代である。PLD-36426の結果は本研究で得られた炭素14年代と整合的である。

蓮野1号墳の黒色土壌層に含まれる微小炭片は土壌を採集で地表の草本植物を焼き払った際に生成されたものと推定される。この微小炭片の起源は当時生育していた草本植物であり、蓮野1号墳の築造年代と一致している可能性が高い。微小炭化物の8試料の測定結果をまとめると〔図1-10〕、

68.3%の確率での推定年代範囲は以下のとおりである。

AD30 - AD42AD (5.3%)

AD59 - AD168 (55.7%)

AD186-AD202 (7.3%)

95.4%の確率での推定年代範囲は

BC 35-BC14 (3.2%)

AD4-AD226 (92.2%)

これらから蓮野1号墳の造成年代は1世紀～2世紀末に収まる可能性が高いと考えられる。

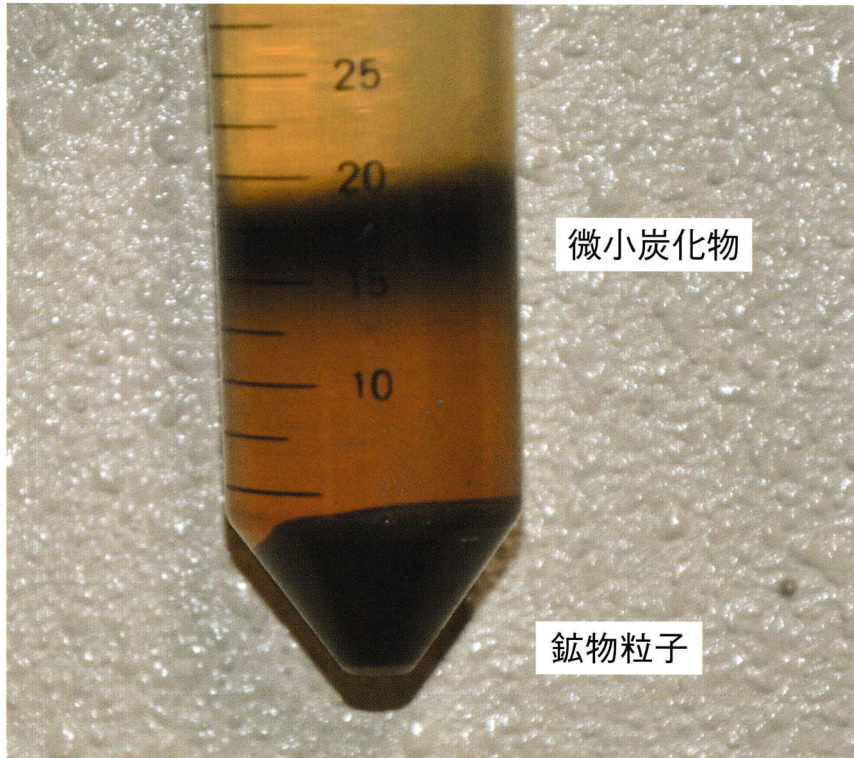


図 1-6 重液 (STP 溶液) を使った鉍物粒子と微小炭化物の分離

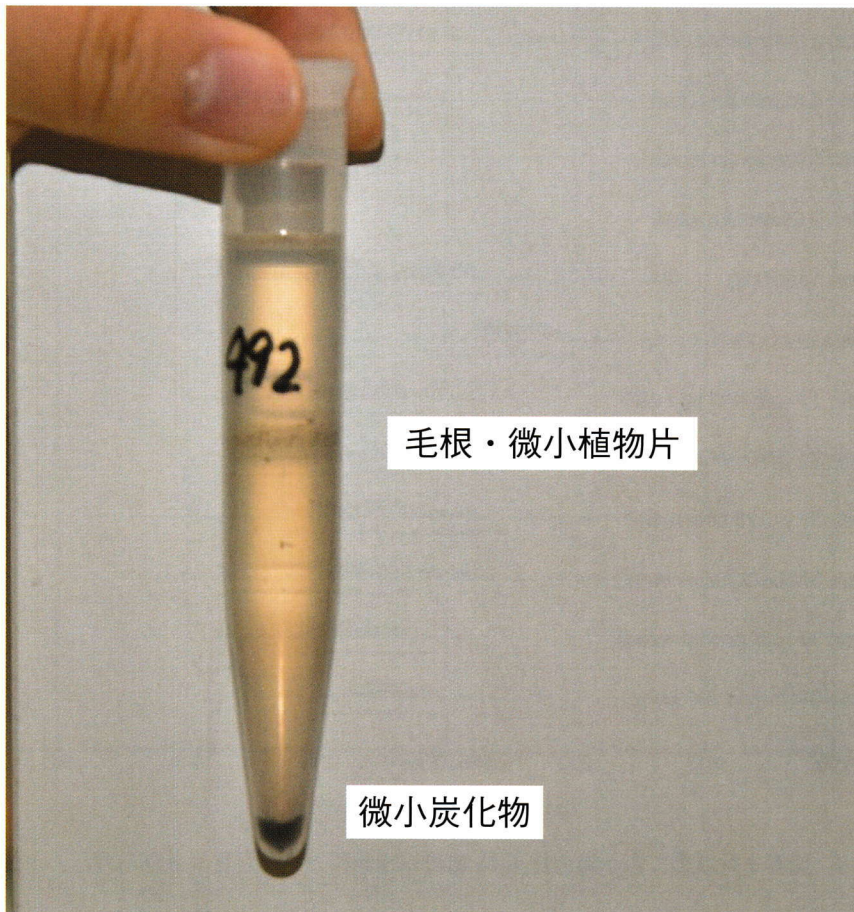


図 1-7 微小炭化物と微小植物片 (毛細根など) の分離

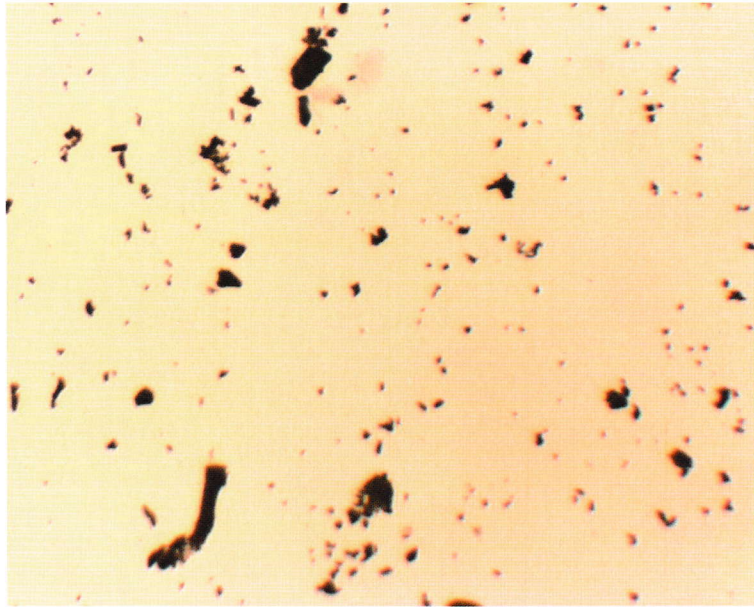


図1-8 蓮野1号墳の黒色土壌から分離された微小炭化物の顕微鏡写真

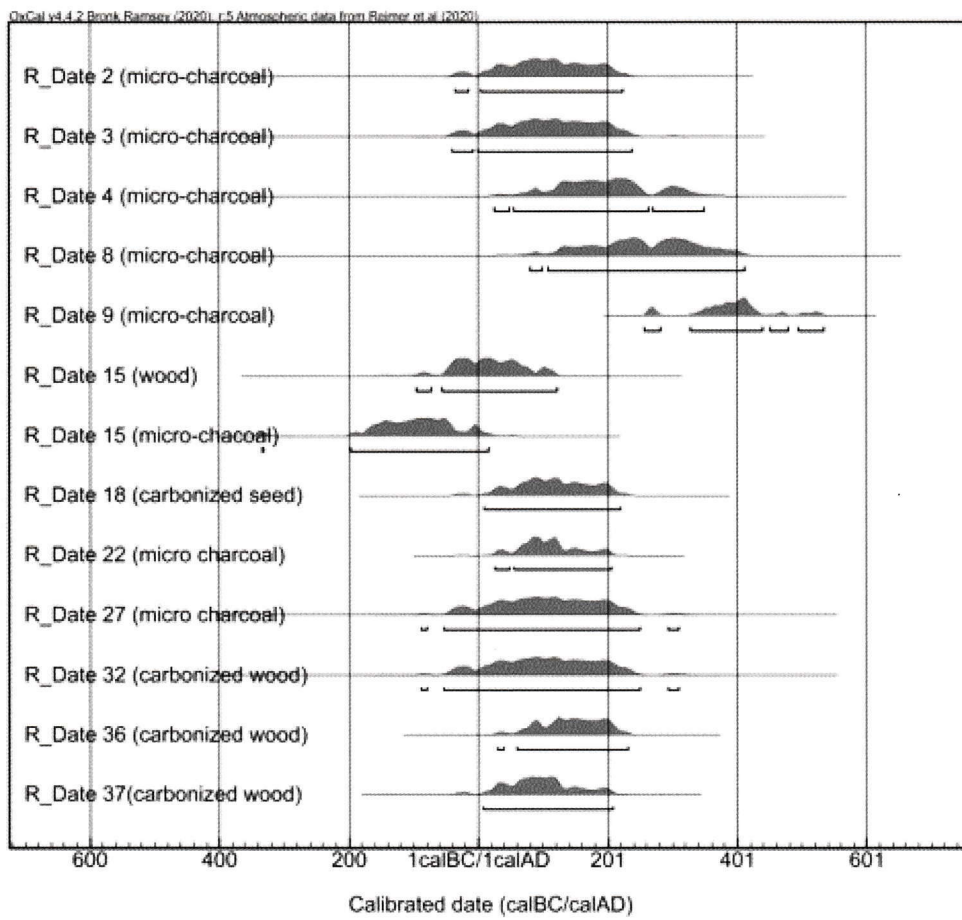


図1-9 蓮野1号墳の黒色土壌の炭素14年代測定結果から推定される暦年代(2σ範囲)

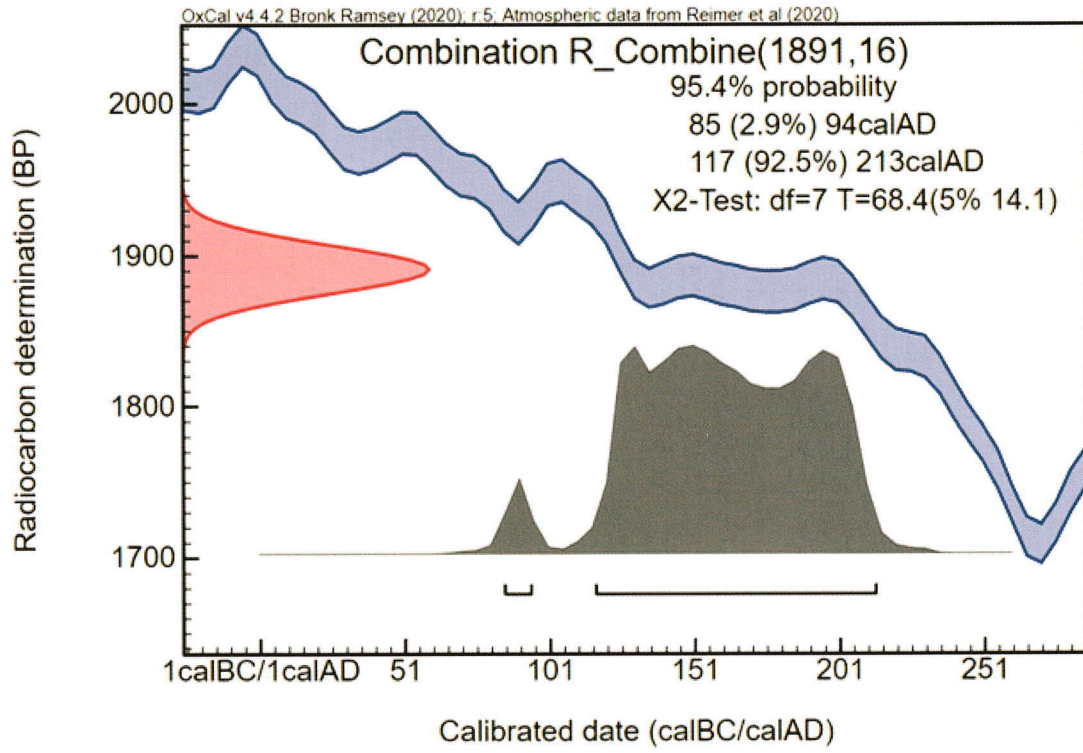


図 1-10 黒色土壤から分離した微小炭化物 8 つの測定結果を用いて推定された蓮野 1 号墳の造成年代

表1-4 測定結果リスト

試料番号	トレンチ	層位	試料番号	採集日	試料	炭素14年代	測定番号	較正年代 (IntCal20利用)	
					タイプ	(BP)	NUTA2-	(cal AD/cal BC, 68.2% 確率)	
1	1 トレンチ北壁	1層	HN1-1	2019/11/28					
2		2層	HN1-2	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)	1925 ± 50	要再測定*1	AD30-AD42 (61.6%) AD59-AD168 (5.6%) AD186-AD202 (1.1%)	
3		5層	HN1-5	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)	1920 ± 60	要再測定*1	AD31-AD40 (2.1%) AD60-AD206 (66.1%)	
4		7層	HN1-7	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)	1845 ± 60	要再測定*1	AD130-AD144 (8.2%) AD156-AD240 (60.1%)	
5		3層	HN1-3	2019/11/28					
6		4層	HN1-4	2019/11/28					
7		6層	HN1-6	2019/11/28	小枝	-175 ± 30	27592	現代 (1960年以降)	
8					小枝	-30 ± 35	27530	現代 (1960年以降)	
		8層	HN1-8	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)	1800 ± 70	要再測定*1	AD132-AD140 (2.1%) AD160-AD190 (8.6%) AD200-AD264 (26.7%) AD274-AD348 (30.8%)	
		10層	HN1-10	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)	1665 ± 35	27859	AD264-AD272 (4.6%) AD350-AD 426 (63.7%)	
		11層	HN1-11	2019/11/28	小枝	-1810 ± 35	27531	現代 (1960年以降)	
11		12層	HN1-12	2019/11/28	炭化物 (木材)				
12		13層	HN1-13	2019/11/28	木材				
13		19層	HN1-19	2019/11/28	木材				
14		20層	HN1-20	2019/11/28					
15		1 トレンチ東壁	61層	HN1-61	2019/11/28	炭化物 (木材) 微小炭片物 (重液分離)	2000 ± 40 2080 ± 40	27858 27860	BC42-AD63 (68.3%) BC154-BC44 (68.3%)
16			61'層	HN1-61'	2019/11/28	小枝	30 ± 65	27332	AD1694-AD1725 (18.2%) AD1812-AD1862 (24.9%) AD1867-AD1916 (25.1%)
17			65層	HN1-65	2019/11/28	小枝			
18			69層	HN1-69	2019/11/28	炭化物 (種子)	1920 ± 40	27333	AD32AD-AD36 (2.1%) AD52AD-AD128 (66.1%)
19			68層	HN1-68	2019/11/28	小枝	-100 ± 40	27334	現代 (1960年以降)
20	E層	HN3- E	2019/11/28	樹皮	-430 ± 40	27336	現代 (1960年以降)		
21	D層	HN3- D	2019/11/28	木材					
22	3 トレンチ東壁				小枝	-930 ± 35	27537	現代 (1960年以降)	
		C層	HN3- C	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)	1925 ± 25	27861	AD62-AD130 (61.6%) AD143-AD156 ( 5.6%) AD194-AD196 (1.1%)	
		B層	HN3- B	2019/11/28					
23	A層	HN3- A	2019/11/28	小枝	-700 ± 35	27538	現代 (1960年以降)		
24									
25	86層	HN3-86	2019/11/28						
26	3 トレンチ南壁				小枝	-630 ± 50	27539	現代 (1960年以降)	
		81層	HN3-81	2019/11/28	微小炭片物 (重液分離)			微小炭化物含有率が低い	

27	3 トレンチ南壁	82 層	HN3-82	2019/11/28	木 微小炭片物 (重液分離)	1925 ± 70	要再測定*1	AD26-AD206 (68.3%)
28		58 層	HN3-58	2019/11/28	木片 微小炭片物 (重液分離)			微小炭片含有率が低い
29		54 層	HN3-54	2019/11/28	種子	-125 ± 80	27540	現代 (1960 年以降)
30		10 層	HN3-10	2017/12/26				
31	5 トレンチ	5 層	HN5-5	2019/12/28	木材	3480 ± 35	27541	BC1878-BC1841 (23.8%) BC1824-BC1791 (21.4%) BC1782-BC1746 (23.0%)
32	3 トレンチ	87 層	HN3-87 (ZT142)		炭	1845 ± 35	27542	AD130-AD144 (8.2%) AD156-AD240 (60.1%)
33	3 トレンチ	86 層	HN3-86-2		枝	-266 ± 40	27544	現代 (1960 年以降)
34	1 トレンチ南部		HN1- south	2017/12/13	炭化物 (凝集)	1965 ± 45	27545	BC22-BC20 (1.1%) AD8-AD120 (67.2%)
35	3 トレンチ	87 層	HN3-87 (ZT106)	2017/12/14	炭化物 (木材)	3265 ± 40	27546	BC1608-BC1576 (18.8%) BC1561-BC1554 (3.6%) BC1546-BC1498 (42.6%) BC1471-BC1464 (3.2%)
36	3 トレンチ		HN3-13- 118	2017/12/14	炭化物 (木片)	1900 ± 35	27548	AD85-AD94 (5.7%) AD117-AD206 (62.6%)
37	3 トレンチ		HN3 (ZT108)	2017/12/14	炭化物 (木片)	1935 ± 35	27547	AD24-AD129 (68.3%)

\* 1 加速器質量分析装置のイオン源が不安定のため再測定が必要 (参照データ)

註

- 1 富加町教育委員会 2019『夕田墳墓群総括報告書1』98頁
- 2 趙哲済氏のご指摘である。富加町教育委員会 2019『夕田墳墓群総括報告書1』77頁、92頁、94頁



## 第2章 美濃の古墳出現期の様相と夕田墳墓群の位置づけ

### 1 はじめに

夕田墳墓群を構成する蓮野1号墳・杉洞1号墳・夕田茶臼山古墳は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて連続して築造された墳墓群であると考えた。暦年代には慎重になる必要があるが、現段階では概ね2世紀後葉から3世紀中頃の年代観を考えている。東海地方の当該期の研究は、弥生時代後期以降の方形周溝墓と前方後方形墳丘墓の階層的なあり方から前方後方墳の成立を求め、東海系土器の拡散という現象と併せて歴史的意義を見出す方向で進展してきた（赤塚 1988・1992 a）。しかし近年の美濃においては、円形墳や前方後円形墳墓が確認されるなど多様な墓制のあり方が想定されつつあり整理が必要である。

夕田墳墓群の位置づけを確認するためには当該期における中小地域での遺跡群の動向や美濃での首長墓の変遷を検討する必要がある。本章において美濃の地域内での位置づけをおこない、その上でさらに広域な周辺地域との比較検討から夕田墳墓群の歴史的価値を見出したい。

そこでまず夕田墳墓群について概観した後に、築造主体となった小地域における当該期の遺跡の状況と日常的な交流圏と推測される半径10km圏内での遺跡の動態について整理し、地域社会の変化の様相を確認する。前者は現在の富加町から美濃加茂市加茂野・蜂屋地内、後者は中濃盆地あるいは加茂野盆地、または内陸回廊（註1）と呼称される領域がおおよそ該当する。

次に美濃地域における首長墓の様相を整理し、画期や変遷そして分布などを捉えて首長層の変化の様相を整理し、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての列島内での位置づけをおこなう。具体的には円形墳や突出部付円形墳の広がりをつえ、比較検討し位置づけていくことになる。

最後にこれらの検討から導き出せる夕田墳墓群築造の歴史的意義を提示したい。

なお本章においては弥生時代後期後半から古墳時代前期を、弥生時代後期後半・弥生時代終末期・古墳時代前期前半・古墳時代前期後半に区分して呼称する。また部分的には古墳時代初頭と呼称する場合もあるが、土器編年等との対応関係は表2-1に示すとおりである。

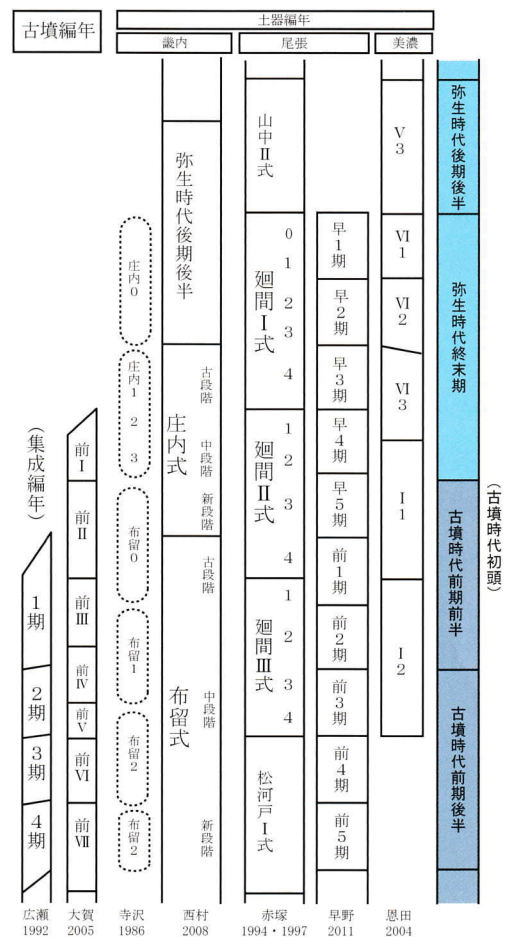


表 2-1 時期区分対応表  
(早野 2018 を基に一部改変)

## 2 夕田墳墓群の概要

まず対象となる夕田墳墓群について築造年代の推定を中心に概略を記す。なお詳細については平成25年度刊行の夕田茶臼山古墳範囲確認調査報告書及び平成30年度刊行の夕田墳墓群総括報告書1を参照していただきたい。

蓮野1号墳の基底部から出土した器台は、成瀬正勝氏が条痕文系の鉢とセットになる「赤褐色の器台」としたもので廻間I式期の初頭まで残る器形とされる（成瀬2000a）。砂行遺跡SBA35・SBE04、古村遺跡SX22などで赤褐色の器台が廻間I式0段階の土器と共伴していることから築造時期を廻間I式前半と捉えるが、これは早野浩二氏が提示する東海と畿内の土器編年の併行関係を参照すると庄内0式併行期と考えられる（早野2018）。庄内式の上限については久住猛雄氏が金沢市大友西遺跡のSE18井戸枅材の年輪年代から169年と導いており（久住2015）、これらの点から築造年代を2世紀後葉としておく。

杉洞1号墳の基底部から出土した高坏は中濃地域に多い坏部が大型の低脚高坏で高木宏和氏が内湾系高坏B1としてものである。高木編年のVI-4期（高木2005）、恩田編年VI-3期（恩田2004a）に該当し、東海地方編年の廻間I式4段階に併行する。廻間I式4段階は近畿編年の庄内式古段階あるいは庄内1～2式に併行すると考えられるが、庄内2式は萩原1号墳出土の画文帯同向式神獸鏡から2世紀末～3世前葉の暦年代が与えられている（久住2015、岩本2018）。

夕田茶臼山古墳は墳頂部で出土した赤彩有孔短頸壺を廻間II式期前半と考えたが、総括報告書1において検討したとおり基盤の岩盤削り出し面で出土した炭化物の年代測定結果を加味してより3世紀中頃と推定している。

また蓮野1号墳の主丘部上には小規模石室がみられ7世紀後半の須恵器が出土したため墳丘の二次利用と考え蓮野2号墳とした。石室上面の検出のみで調査を終了したため墳丘との関係について機会があれば調査・検討されることを望む。庄内式期の墳墓には瀬戸内系の石材を多用する埋葬施設を構築する場合もあり、後述する円形指向墓の流入は東瀬戸内地域を起点として北近畿・琵琶湖東岸を経由していると考えており、関係を考慮しておくべきかも知れない。

蓮野1号墳と杉洞1号墳が弥生時代終末期の墳丘墓、夕田茶臼山古墳が古墳時代初頭の前方後円墳と理解し、推定される築造年代から概ね1代1墳で築造されたと推定され、首長権を継承した被葬者が夕田の谷を共有しつつも立地を少しずつ移しながら連続して首長墓を築造した。狭小な谷の中で弥生時代終末期の墳丘墓から古墳時代初頭の前方後円墳へと発展しながら連続して首長墓が築かれた非常に貴重な事例であるといえる。

名称	墳形	全長	時期
蓮野1号墳	突出部付円形墳	推定 28.0 m	廻間I式前半
杉洞1号墳	突出部付円形墳	推定 30.0 m	廻間I式後半
夕田茶臼山古墳	前方後円墳	39.5 m	廻間II式期
蓮野2号墳	—	—	7世紀後半

表2-2 夕田墳墓群の概要

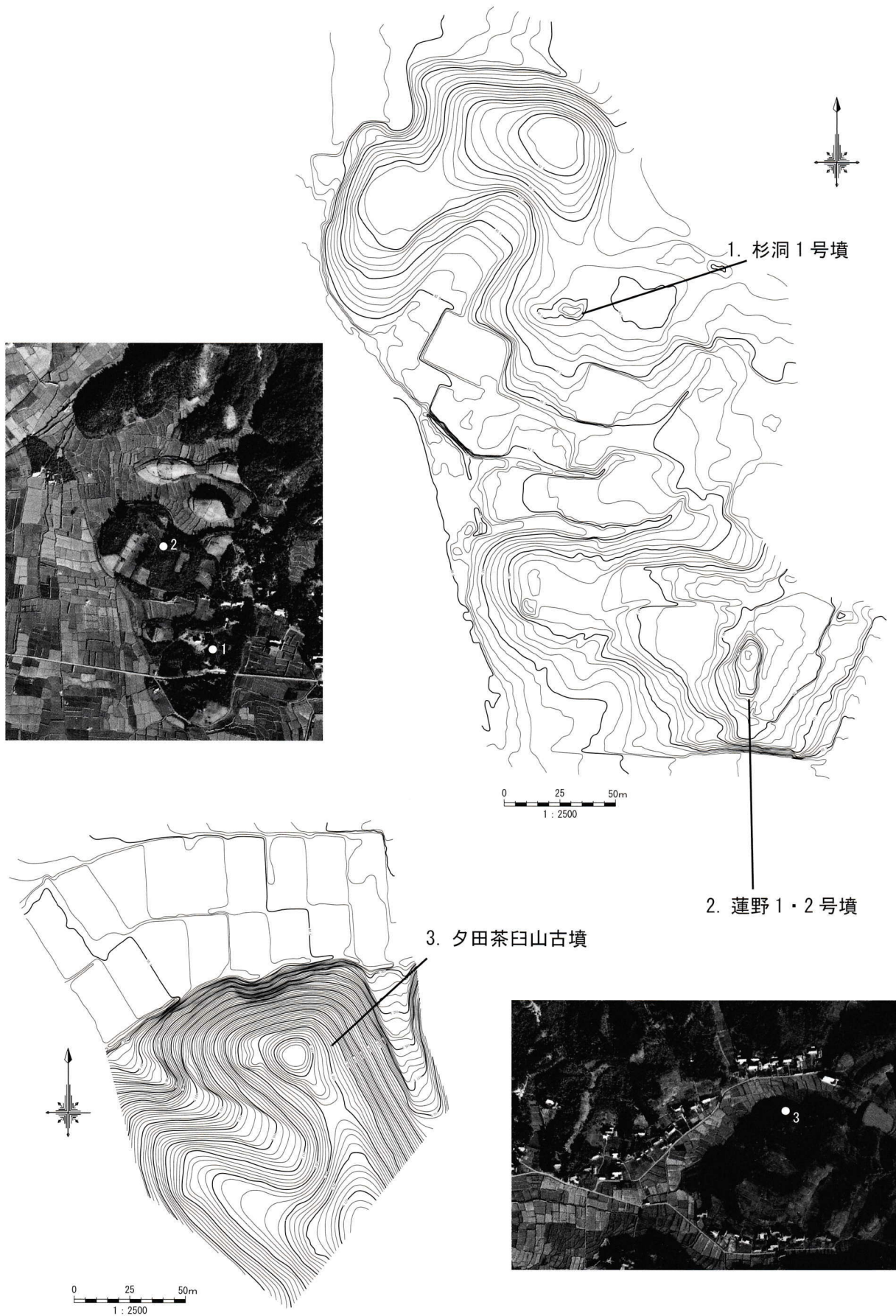


図2-1 夕田墳墓群 現況地形測量図 (S = 1/2500)  
※航空写真は国土地理院 USA-R2046-30 (S23 米軍撮影) を一部改変

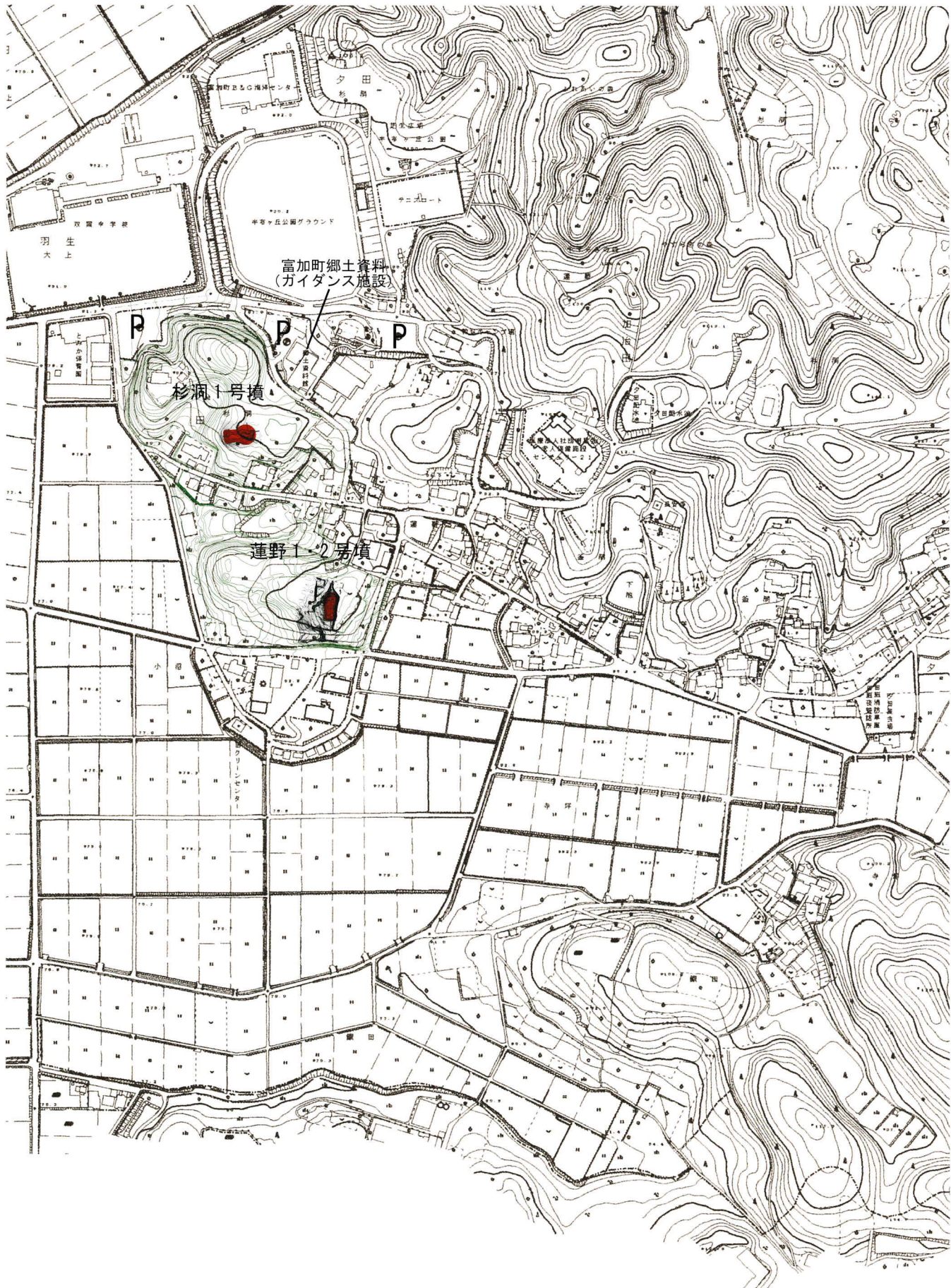
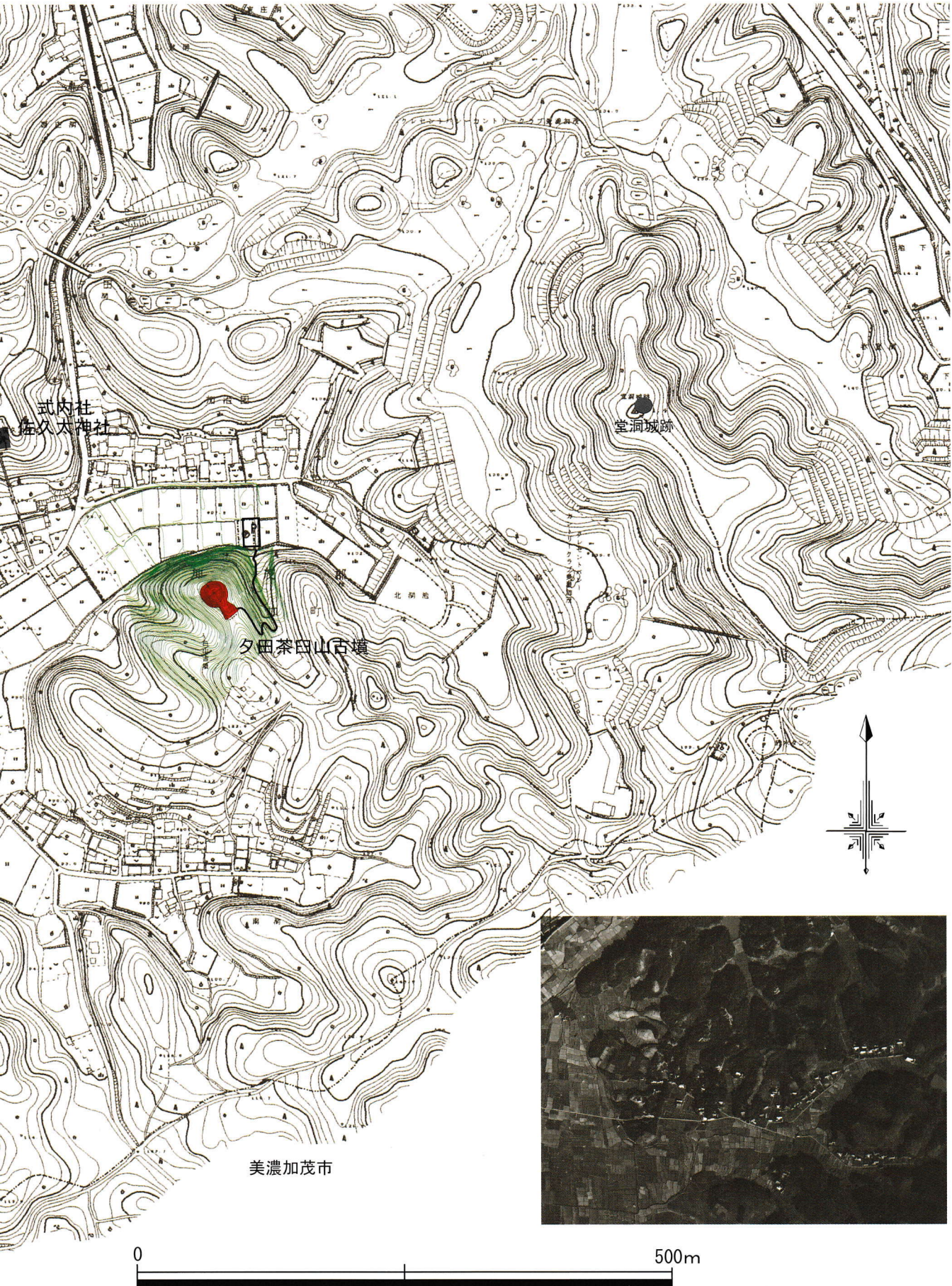


図2-2 夕田墳墓群位置図 (S = 1/5,000)  
※航空写真は国土地理院 USA-R2046-30 (S23 米軍撮影) を一部改変



### 3 富加町における当該期の遺跡分布と消長

当町では墳墓の状況が明らかになりつつあるが、集落遺跡の状況は調査が限定的なため明らかになっておらず、築造集団の様相が明確にはみえてこない。こうした造墓活動の背景には地域社会の階層化など社会の構造が大きく変化した可能性が考えられ、それは集落のあり方にも何らかの影響を与えている可能性がある。そこで資料的な制限があるものの本稿で小地域内での遺跡の様相を整理しておく必要があり、今後への見通しを提示することにする。

弥生時代前期の土器が採取される遺跡として恵日山遺跡が報告されているが遺構は確認されておらず、土器の出土量は弥生時代中期の貝田町式以降から増加するため中期以降を段階に分けて概観する。

**弥生時代中期** 長良川水系の川浦川左岸に立地する東山浦遺跡（旧称は半布里遺跡）において当該期の竪穴建物跡3棟が確認されている（註2）。現在の役場および農協周辺の半径100m程度のエリアに弥生時代中期の貝田町式～高蔵式の土器が濃密に分布しており、このエリアが居住域を示すと考えられる。また同遺跡では信州系の弥生土器（百瀬・栗林式）が出土しており（註3）、飛騨を経由した広域の地域間交流や流通経路を想定させる点で重要である。その他にも北野遺跡（高畑地区）や大山車塚遺跡（大山地区）で貝田町式の土器が採取されているが（註4）、分布は薄く遺構が確認された例はない。

**弥生時代後期後半～終末期** 後期前半の遺構・遺物は確認されておらず、様相は不明である。採集遺物もほぼ無いことを考えると中期の集落は後期へとスムーズに継続しておらず縮小または途絶のような状況かもしれない。あらためて集落の動向が見え始めるのは後期後半の山中Ⅱ式期からである。

後平遺跡（大平賀地区）は山間の丘陵傾斜面に立地した集落遺跡であり、当該期の竪穴建物8棟、方形周溝墓1基が確認されている（註5）。集落の存続時期は山中Ⅱ式期に始まり廻間Ⅰ式期で集落の造営が途絶える。

稲荷遺跡（高畑地区）も丘陵部に立地した集落遺跡であり、竪穴建物2棟が確認されている。廻間Ⅰ式後半の高坏と受口状口縁甕が出土している（註6）。

東山浦遺跡のHY2004-21トレンチでは炉底状の被熱面をもつ土壙〔図2-4〕が検出されており、被熱面を覆う礫から廻間Ⅰ式期の土器や砥石が出土している（註7）。出土器型式からは、蓮野1号墳と杉洞1号墳が築造された間の時期に位置付けられ、両墳墓に近い位置にあるため注目される。この調査は個人住宅建設に伴う試掘調査であったため遺構の全容は明らかにできていないが、炉底状の被熱面はかなりの激しく焼けており、土器焼成遺構あるいは鍛冶炉の可能性などを検討している。中期の土器も出土しているが東山浦遺跡の中期集落域からは少し外れた位置にある。

その他、大山池下遺跡（大山地区）、白山神社遺跡（井高地区）、北洞遺跡（夕田地区）などで廻間Ⅰ式期の土器が採取されており（註8）、丘陵裾部に遺跡が分布する傾向が認められる。

**古墳時代前期** 多くの集落遺跡は廻間Ⅰ式期で途絶え、廻間Ⅱ式期からⅢ式にかけての古墳時代前期前半以降の遺跡の様相がつかめなくなる。集落の移動があると推測できるが、当該期の遺物出土量自体が減る傾向にある。

**遺跡の消長と変遷** 以上の遺跡の消長を踏まえ、集落変遷を考察してみる。弥生時代中期の貝田町式期に東山浦遺跡を中心とした川浦川左岸に本格的な集落が営まれ、高蔵式期まで存続する。当該期

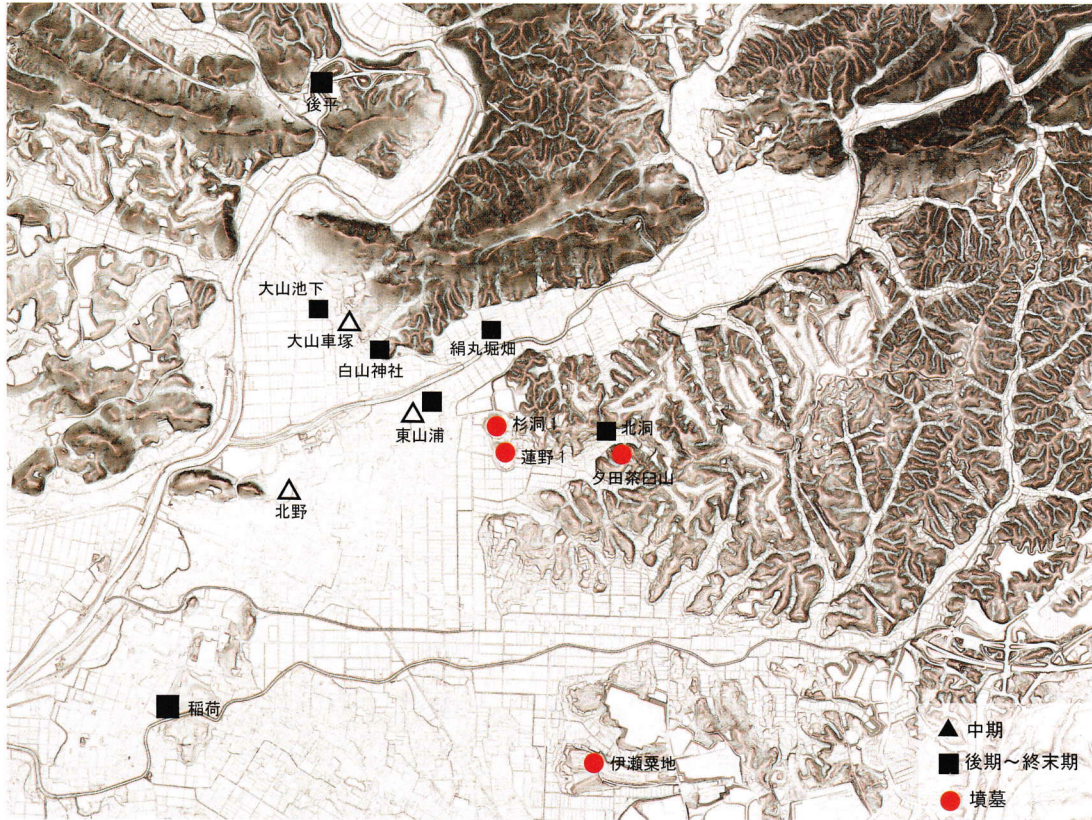


図 2-3 富加町の弥生時代中期～終末期遺跡分布  
(地図は岐阜県 CS 立体図より引用)



図 2-4 東山浦遺跡 HY2004-21T 調査の状況

の土器の散布が東山浦遺跡に濃密な分布を示す一方で、他の遺跡では希薄であることを考えると弥生時代中期の集落は変動の少ない固定的な集落であった可能性が考えられる。

弥生時代後期前半の状況は不明で空白期となるが、山中式後半から丘陵斜面に集落が営まれるようになり廻間Ⅰ式期まで存続する。また廻間Ⅰ式期では山裾部に遺跡が点在するなど、遺跡数の増加とエリアの拡張がみられる。

以上の状況から弥生時代中期に発達した東山浦遺跡の集落は後期へとスムーズに移行（存続）せず、空白期を挟みながら後期後半になって丘陵斜面集落など新たな集落展開が進む。廻間Ⅰ式期にはそれまで集落域ではなかったエリアへと広がるという展開が想定できるが、古墳時代前期前半以降へは続かず集落が確認できなくなる。

#### 4 中濃地域の遺跡分布と消長

次に中濃地域に視点を広げて集落遺跡（墓域を含む）の消長から地域社会の変化の画期について考えてみたい。その前に対象地域の地勢を確認しておく。濃尾平野の北東端に位置した各務原市北部の丘陵地帯（美濃帯）と飛騨方面へつながる山塊地に挟まれた北西から南東へ延びる盆地帯で、北西に長良川、南東に木曽川、東に飛騨川が北東から南西に向けて流れ、河岸段丘や扇状地を形成する。盆地帯の中央を二分するように長良川の支流である津保川などの中小河川が流れ、盆地西部において長良川と合流する。現在の関市・富加町・坂祝町・美濃加茂市が該当するが、木曽川左岸中流域である可児地域についても半径10kmの生活圏に含まれると考えられるため検討の対象とする。なお本章においては可児市・可児郡域も含めたこの領域を「中濃盆地」と呼称する。

まず中濃盆地の集落遺跡の消長を表2-3にまとめ、これを基に該当遺跡を次の4つに類型化した。すなわち弥生時代中期から長期的に存続する遺跡（A）、新たに弥生時代後期後半から展開し短期に衰退・途絶する遺跡（B1）、同じく弥生時代後期後半に開始し古墳時代に入っても存続する遺跡（B2）、比較的長期存続する廻間Ⅱ式期以降に展開する遺跡（C）の4類型である。そして伝統的な集落との関係を示すために、これらの中で弥生時代中期にも存在した遺跡については頭に（a）を付して遺跡分類とした。例えば中期と終末期の建物跡のみ確認される短期集落の場合には（aB1類）と表記される。また、それぞれの分布を図2-5に示した。

調査面積や調査の進展度合いが遺跡や地域によって異なっているため、当時の状況をそのまま反映しているとは限らない点に留意が必要であるが、現時点でおよそ次の点を指摘することができる。

- ①弥生時代後期前半に遺跡数が減る傾向がある。
- ②弥生時代後期後半に遺跡数が増え、山間地などのそれまで集落展開が少なかった地域へ広がる傾向がある。集落の拡散あるいは分散の傾向と捉えられる。
- ③上記の遺跡にはB1類のような短期集落が多い。
- ④B2類が少なく、C類が多いことから弥生時代後期後半に展開した集落は定着度が低く、古墳時代初頭以降の集落の定着度は高い。
- ⑤C類の展開は木曽川水系が顕著である。
- ⑥弥生時代中期集落aはB・C類と重なっている点を考えると、中期集落は途絶した訳ではなく、小さ



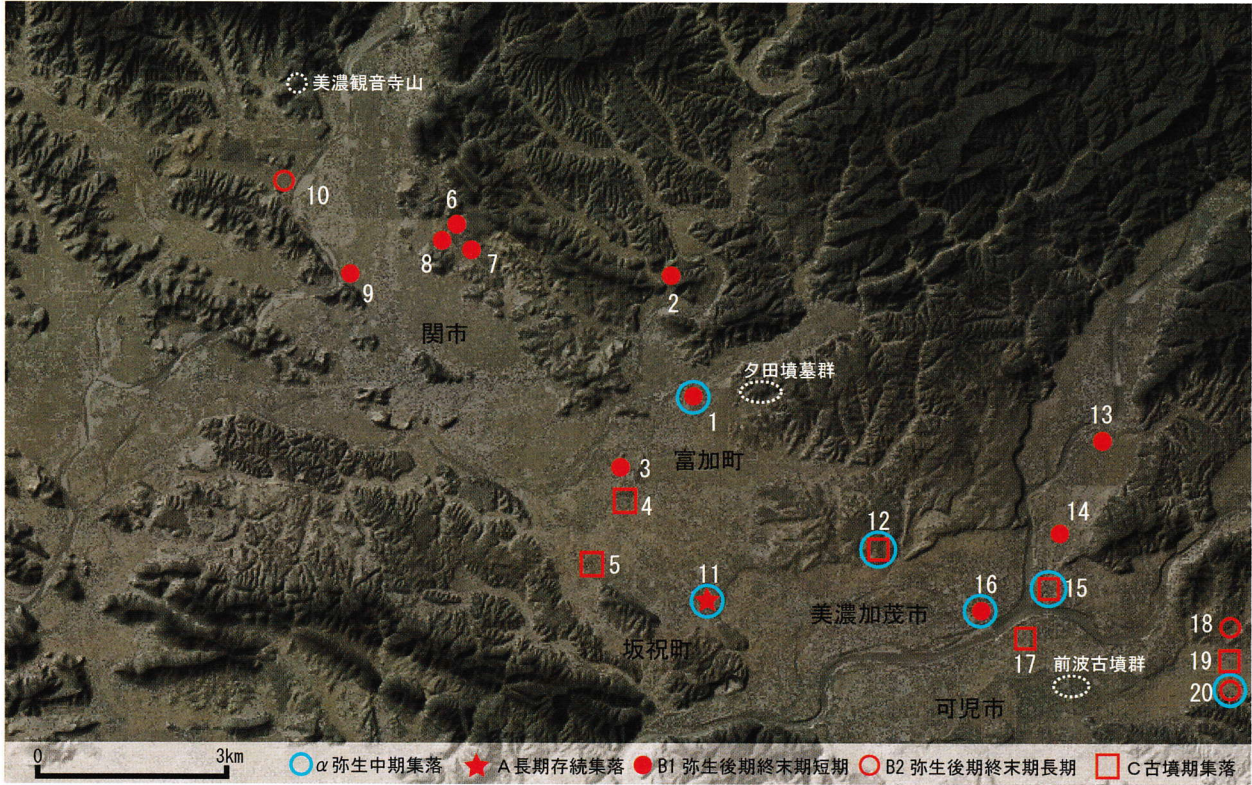


図 2-5 中濃地域（木曾川左岸含む）の集落遺跡分布  
 (地図は国土地理院地図の色別標高図をより引用)

水系	No.	遺跡名	形態	弥生時代中期		後期		終末期		古墳時代前期		分類	備考
				貝田町	高蔵式	八王子古宮～山中Ⅰ	山中Ⅱ	廻間Ⅰ	廻間Ⅱ	廻間Ⅲ	松河戸Ⅰ		
長良川水系	1	東山浦	集落	————				————				a B1	
	2	後平	集落				————	————				B1	
	3	稲荷	集落					————				B1	
	4	唐鋤	集落							· · · · ·		C	
	5	大杉・大杉西	集落	————		—— — —	—— — —	————	————	————		C	
	6	砂行	集落				————	————				B1	破鏡
	7	深橋前	集落				————	————			—— — —	B1	筒型銅製品
	8	南青柳	集落				————	————				B1	鉄製ヤリガンナ・鉄鏃
	9	重竹	集落			————	————	————				B1	
	10	古村	墓域					————	————			B2	
木曾川水系	11	東野	集落	————	————	————	————	—— — —	—— — —	————		A	
	12	尾崎	集落	————	—— — —					————		a C	
	13	為岡	墓域					————	————			B1	
	14	今	集落					————	————			B1	
	15	牧野小山	集落	————	—— — —					————		a C	
	16	野笹	集落	————			————	————				a B1	
	17	宮之脇	集落					————	————	————		C	
	18	金ヶ崎	集落					————	————	————		B2	
	19	顔戸南	集落					————	————	————		C	
	20	柿田	集落	————			————	————	————	————		a B2	

表 2-3 中濃（木曾川左岸含む）の集落遺跡消長表

な移動を繰り返すようになるか規模が縮小した可能性がある。

最も大きな画期は弥生時代後期後半にあり、木曾川水系にやや偏在していた弥生時代中期集落から後期後半以降には主として加茂野の段丘を一段上がった北西部（富加・関方面）への展開が進む。それ以前まで遺跡が認められていない地域への展開が多く、前項で述べた富加町内の遺跡動向からも同様の傾向が窺えた。集落の動向が活発化しており地域社会が大きな転換期を迎えていたことは想像に難くない。特に当該期の集落動向で顕著な傾向としては、成瀬正勝氏が「砂行型急斜面集落」と定義した丘陵傾斜地への集落展開がある。成瀬氏はこうした集落の誕生の背景には地域社会の激しい階層分化を想定しており（成瀬 2000b）、同時に前述した中濃盆地の動向と結びつけて考えると集落の拡散と連動した丘陵傾斜地への展開があったと位置付けられ、中濃盆地における社会変化の動向と考えることができる。弥生時代後期に集落遺跡が激減する現象は尾張平野部においても確認されており、年輪酸素同位体比による気候変動パターンと遺跡の消長や分布との対比によって弥生時代中期末～後期前半にかけての急激な寒冷化と湿潤化による自然環境の変化が居住域を流動化させ、集落の機能分化等を促し新たな集落景観を生んだと指摘されている（樋上 2020a）。様々な要因による広域な社会変化が集落の機能分化を進行させている可能性が高い。

そして弥生時代後期後半に新たに展開した集落は、古墳時代前期前半以降も継続する例が少ない。それに対して古墳時代前期前半以降は再び木曾川水系に集落が増加しており、地域の重心が南東部に変遷したかのように見える。木曾川水系では中期集落との重なりもみられることから、木曾川水系に点在した中期の拠点的な集落（a）が後期に入って縮小あるいは機能分化し、後期後半から終末期にかけて中濃盆地北西部へ集落を展開させ、古墳時代前期前半に至って再び木曾川水系に集約・偏重していくという変遷過程を想定することができる。

こうした動向は墳墓の築造動向とも同調的である。弥生時代終末期には中濃盆地北西部域に観音寺山古墳や夕田墳墓群などが築造され、このエリアの動向が活発で顕著となる。しかし古墳時代前期前半になるとその勢力は急速に衰退し、それに対して木曾川左岸流域の可児地域で高倉山古墳・西寺山古墳・野中古墳・前波長塚古墳などの首長墳が連続して築造され勢力が強大化する。弥生時代後期後半から盆地北西部へ展開した集団は終末期には有力首長層を析出させるが、古墳時代前期前半以降に再び木曾川流域の集団と統合し勢力の強大化が図られたと推測する。

こうしてみると中濃盆地は水系によっておよそ東西に二分して考えることができ、それぞれ遺跡の動向に違いがあるものの領域としては連動した一体の動きをしていると考えられる。前述のように後期前半の気候変動が契機となって集落の機能分化が促されると推測されるが、一方で大垣市の荒尾南遺跡ではこの時期に手工業生産のあり方に変革がみられる。すなわち弥生時代後期に誕生した集落域で終末期にかけて木製品生産の集落内分掌が成立したとされ（樋上 2020b）、青銅器生産の分散化を示す小型青銅器生産においても地域の拠点として機能し始めている（岩本 2020）。また弥生時代後半期の北陸地域では、鉄製工具の導入により木製品工房的な生産単位が発生し弥生時代後期以降に工房的集落を派生させて地域間分業体制が成立するといった集落動向の実相が示されている（林 2019）。他地域の事例であるが、弥生時代後期から終末期にかけての手工業生産の進展は集落の動態に大きく影響を与えた。つまり生活圏などの一定の領域における遺跡の機能分化の動きは手工業生産を背景とした地域社会構造の変化を反映している可能性がある。B1類集落の南青柳遺跡では鉄製ヤリガンナと鉄鏃が、深橋前遺跡で

は筒型銅製品、砂行遺跡では破鏡など他の集落で出土しない特徴的な遺物が出土しており、B1類集落の拡散が単なる居住域の移動や拡大だけでなく、集落の機能分化や手工業生産の変容などとの関わりも考えておく必要がある。

変化の内実には資料の増加を待つ必要があり今後の課題であるが、夕田墳墓群が2つの水系の中間地点に立地しており、弥生時代中期以来の伝統的な拠点集落がある木曽川流域からみれば、弥生時代後期後半以降に集落域が拡散・偏重していく最前線に立地しているといえる。この点からも夕田墳墓群が中濃盆地における弥生時代後期後半以降の地域社会の変容を背景としていることが想定できるだろう。

## 5 美濃における首長墓の様相と夕田墳墓群の位置付け

### 1) 首長墓の画期と変遷

対象とする時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期前半で東海地方の土器編年における山中Ⅱ式から廻間Ⅲ式期とするが、首長墓の動向を把握するため前期後半についても触れる。そして当該期の墳墓の中から立地・墳形・出土遺物・墳丘の規模等において特徴的な事例を抽出して検討する。各報告書に掲載された所属時期や先行研究を参考として変遷図〔図2-6〕を作成し、画期を考慮しながら5つの段階を設定した(註9)。

なお、地域区分として長良川以西を美濃西部、以東を美濃東部と大きく区分し、さらに揖斐川流域を西濃、長良川流域から木曽川右岸域までを中濃、木曽川以東を東濃と小区分して記述する。

**第1段階(山中Ⅱ式期～廻間Ⅰ式期前半)** 当該期にやや先行する可能性もあるが、長宜子孫銘内行花文鏡を出土した瑞龍寺山頂墳は、集落域や共同墓域からは隔絶した丘陵上に築かれ、同時代の墳墓と比べて規模や出土品において突出している(荻野1985、赤塚1992b、恩田2004)。弥生時代後期の段階にすでに顕著な階層分化の可能性を想起させる事例であるが、発掘調査状況や鏡の詳細な出土状況等に課題を残すとされる。しかしながら西濃にある象鼻山古墳群での近年の発掘調査では、墓域形成初期の段階で基壇を持つ直径17.5mの円形墳である3号墳が築造され、それに続く8号墳も確認されるなど(中島2010)、当該期が隔絶された首長墳の誕生期である蓋然性は高まっている。その他にも各務原市の加佐美山1号墳や可児市の神崎山墳丘墓のように丘陵上に築造される事例が多いのが特徴であろう。

加佐美山1号墳では基底部に竪穴状遺構が設けられており蓮野1号墳との類似性がみられる。竪穴状遺構からは受口状口縁甕が多く出土しており近江地域との関連も想定される。

夕田墳墓群では蓮野1号墳が当該段階の後半に位置づけられる。上述のような美濃における首長墳の誕生期の墳墓と位置づける。夕田墳墓群が立地する丘陵から南へ2kmほどの場所には1辺10mの方形墳である伊瀬栗地墳丘墓があり(斎藤1994)、出土土器から第1段階に位置づけられる。当墳墓では北部九州・北近畿・北関東に分布する刃関双孔鉄剣が出土しており鉄器の広域流通経路との繋がりを示すものとして興味深い。

伊勢湾沿岸では弥生時代中期後葉以降に方形周溝墓が主要な墓制となるが、美濃地域の特に台地や山間部では定着期が後期以降となる(鈴木2002)。方形周溝墓の定着が若干遅れるなか、それと間を開けず隔絶した首長墓と呼びうるものが誕生する状況がどのような共同体の状況を反映しているのだろう

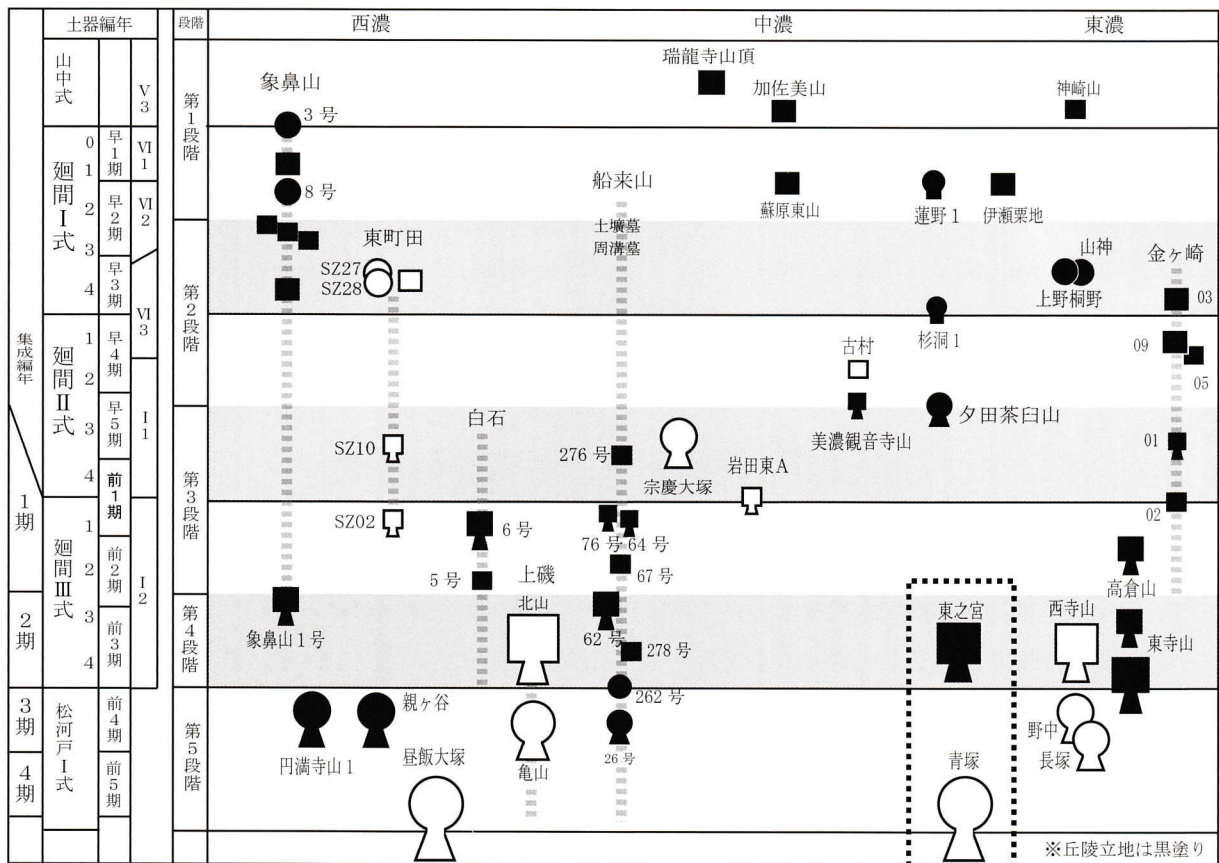
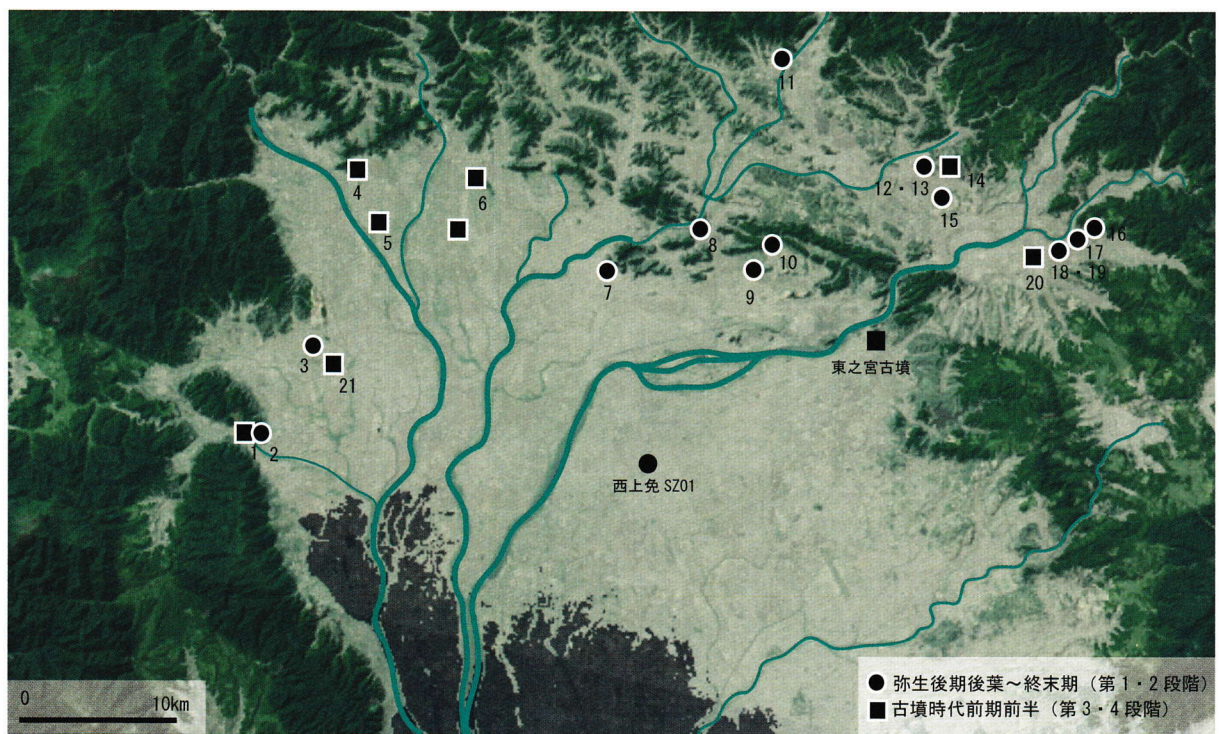


図2-6 美濃の弥生時代後期後半～古墳時代前期の墳墓編年図



1. 象鼻山1号墳 2. 象鼻山3・8号墳 3. 東町田 SZ27・28 4. 白石古墳群 5. 北山古墳 6. 船来山古墳群 7. 瑞龍寺山頂墳 8. 岩田ASZ5  
 9. 加佐美山1号墳 10. 蘇原東山1号墳 11. 美濃観音寺山古墳 12. 蓮野1号墳 13. 杉洞1号墳 14. 夕田茶臼山古墳 15. 伊瀬粟地墳丘墓  
 16. 金ヶ崎墳墓群 17. 高倉山古墳 18. 上野山神弥生墳丘墓 19. 上野桐野弥生墳丘墓 20. 西寺山古墳 21. 荒尾南 SZC05

図2-7 美濃の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の主な墳墓位置図

か。弥生時代後期以降に活発化する方形周溝墓の造墓活動と同時進行で、共同体内をさらに急激に階層分化させた要因が何であったのか。隔絶した首長層の実像や当該地域の状況を把握する必要がある。

**第2段階（廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半）** 首長墳と呼びうる事例が増加する段階である。前段階に形成された象鼻山古墳群では9号墳以降は造墓活動が衰退するが、代わって大垣市の東町田遺跡において象鼻山古墳群と同じく盛土によって高塚を指向する円形墳SZ27・28が築かれ、墓域は廻間Ⅲ式期まで継続する。同じく円形墳の事例としては、美濃東部の上野桐野1号弥生墳丘墓や上野山神弥生墳丘墓が確認されている。夕田墳墓群では突出部付円形墳である杉洞1号墳が該当する。この段階では盛土で高塚を指向する円形墳の事例が増加し分布地域を広げている。

美濃地域は基本的には濃尾平野の状況と同じく方形周溝墓を基調とした方形の墳墓が趨勢を占める地域であるが、当該段階では円形墳が比較的安定的に受け入れられ、主に首長墓の墳墓形態として採用された可能性が高い。円形墳の古い段階の事例としては、西濃の荒尾南遺跡（大垣市）にて弥生時代中期後葉（凹線文期）の円形周溝墓SZ045が確認されており円形墓の原理が比較的早い段階に流入しているようである。

墓域形成については、象鼻山古墳群や東町田遺跡、船来山古墳群（本巣市）、白石古墳群（揖斐川町）など美濃西部では群・墓域の形成がみられ、方形周溝墓と前方後方墳、円形墳が同一墓域内に共存する事例が多い。一方、美濃東部では伊瀬栗地墳丘墓、上野桐野1号弥生墳丘墓、杉洞1号墳、蘇原東山1号墳のように第1段階に引き続き丘陵上に立地し明確な墓域を形成しない傾向がある。

**第3段階（廻間Ⅱ式期後半～Ⅲ式前半）** 前方後方墳の築造が開始される段階であるが、東町田遺跡SZ10・SZ02や岩田東A遺跡SZ5などのように、この段階ではまだ方形周溝墓が築かれる集団墓域に築造されており弥生墳丘墓からの連続性を認める。東町田遺跡では円形墳は継続せずに前方後方墳と方形周溝墓群が墓域を形成する。西濃地域では祭式を共有しながらも多様な墳形や規模で共同体内の格差を表象する墓制のあり方が推測される。第3段階に至り円形墳は消滅あるいは衰退の傾向を示し、首長墓＝前方後方墳という共通の図式が形成されていく。

当該段階で盛行する前方後方墳は概ね全長20m程度と小規模である。規模は徐々に大型化すると推測されるが全長40mが限界値のようである。築造方法に目を向けると、美濃市の美濃観音寺山古墳における岩盤削り出し整形は瑞龍寺山頂墳との共通性がみられ、北陸や丹後地域で盛行する台状墓の影響も考慮されるが現段階で関係性は定かではない。いずれにせよ弥生墳墓的な築造方法が基盤になっていると考えてよいだろう。次に金ヶ崎遺跡SX05にみられる土手状盛土も周溝墓などの盛土構築方法との連続性があり過渡期の様相を読み取ることができる。第3段階の前方後方墳にはまだ弥生時代の要素が多く残っているという点で弥生墳丘墓の伝統を継承した前方後方墳の段階といえる。

一方で象鼻山1号墳は、盛土と葺石のあり方、出土品などにおいて突出した存在である。報文では出土土器を基準に廻間Ⅲ式初頭に位置づけられている（宇野ほか1999）。しかし墳丘の築造法をみると前期後半以降に築造法の主流となる小丘を連ねて内部を充填し平坦面を積み上げていく所謂「プレート積重工法」（樋口1997）の胚芽がみられる点や、出土した琴柱形石製品について古相に位置づけない見解（岡寺2005、西島2007）があり、新しい要素が多い古墳といえる。弥生墳丘墓の伝統の中にある古相の前方後方墳とは別の要素を取り込んだ過渡期の前方後方墳と捉える考えもあり（中井2005）、ここでは第4段階の要素が多い第3段階と第4段階の過渡期資料として位置づけておきたい。

次に夕田茶臼山古墳についてである。墳丘規模は全長 39.5 m であり当該段階で推定される限界値に収まるものの墳形は不整形な前方後円墳である。しかし墳頂部の土手状盛土による築造法や墳頂部の盛土厚等をみると、それ以前の美濃地域の墳丘墓にみられるものと同質であり、その範疇を大きく超えるものではない（島田 2014）。そして古村遺跡や為岡遺跡などの中濃地域の方形周溝墓にみられるような赤彩のある有孔短頸壺を供献土器として利用しており、弥生時代以来の伝統的な祭式を共有している可能性がある。北條芳隆氏は、弥生墳丘墓からの連続的変化として地域伝統を保持した出現期前方後円墳を「第1群前方後円墳」、巨大前方後円墳の影響下に成立したものを「第2群前方後円墳」と整理している（北條 2000）。夕田茶臼山古墳の特徴を勘案すれば弥生墳丘墓を起点とする伝統を継承した第1群の前方後円墳と言えよう。この観点から現段階では第2段階と第3段階の過渡期に位置づけられるが、炭化物年代測定の結果（註10）を勘案し3世紀中頃と考えて第3段階に含めた。

夕田茶臼山古墳については第2段階で成立する円形墳との関連性の中で成立している見通しを提示した（島田 2018）。前述したように第2段階での地域間広域交流から成立したと考えられる。

もう1つ出現期の前方後円墳とされる事例として本巣市の宗慶大塚古墳が挙げられる（高木 1989）。当該古墳は低地に立地し、全長 60 m という規模を考えると地域伝統の連続性の中で捉える材料は少ない。象鼻山1号墳の墳丘規模を超えるものであり、次の第4段階の首長墳の特徴に近いように思える。時期的な位置づけについて今後の調査の進展に期待したい。

第3段階では墳墓の消長において地域格差が認められる。美濃西部では前段階からの墓域の連続性が認められるが、中濃では衰退していく状況がみられる。美濃東部でみても当該段階から首長墳の造営が衰退傾向となる。

**第4段階（廻間Ⅲ式期後半）** 首長墳は基本的に前方後方墳を選択し、大野町の北山古墳や可児市の西寺山古墳などのように全長 60～80 m の大型前方後方墳が築かれる。立地においても、その後に大型の前方後円墳が築かれるような平地が選択されるようになる。これらは倭王権の前方後円墳の影響を受けて成立した前方後方墳であり、前段階の前方後方墳とは異なる性質の墳墓であると指摘されている（中井 2005）。

**第5段階（松河戸Ⅰ式期後半）** 首長墓において普遍的に前方後円墳が築造される。倭王権との結びつきの中での地域経営という普遍的な体制が完遂された段階である。

## 2) 墳墓の立地による地域的まとめ

美濃地域における弥生時代後期から終末期の墳墓には丘陵上に築造されるものが多い点が特徴として指摘されており（中井 2001・2017、恩田 2004b、島田 2018）、夕田墳墓群についてもその一群と考えられる。そこで本項では墳墓の立地と構成について類型化を検討し、その分布をみることで地域的なまとめを整理する。

立地では台地や低位段丘、扇状地などのように弥生時代の基本的な集落立地とほぼ同じような平地に立地するもの〔A〕と丘陵など集落域から隔絶した場所に築造されるもの〔B〕があり、構成については墓域を継承するもしくは群を形成するもの〔1〕と、墓域を継承しない単独もしくは数基で構成されるもの〔2〕がみられる。また墓域や群を構成するものには単一の墳形〔a〕で構成されるものと多様な墳形〔b〕で構成されるものがある。調査面積が異なっており全容が明らかになっていない点には留

遺跡名	所在地	立地	墳形	規模 m	所属時期	周溝	墓壇	副葬品		
								鉄製品	青銅製品	石製品ほか
東町田遺跡 SZ10	大垣市	段丘下位面	前方後方形	17.4	廻間Ⅱ式期	○				
東町田遺跡 SZ02	大垣市	段丘下位面	前方後方形	22.0*	廻間Ⅲ式前半	○				
東町田遺跡 SZ27	大垣市	段丘下位面	円墳	17.6	廻間Ⅰ式期	○				
東町田遺跡 SZ28	大垣市	段丘下位面	円墳	14.0	廻間Ⅰ式期	○				
象鼻山1号墳	養老町	丘陵	前方後方形	40.1	廻間Ⅲ-2	×	構築	鉄剣6・鉄刀2・鉄鏃44	双鳳文鏡	琴柱型石製品3
象鼻山3号墳	養老町	丘陵	円形(方形基壇)	17.5(上円部)	山中Ⅱ後半～廻間Ⅰ-0	×				
象鼻山4号墳	養老町	丘陵	方形	23.9×26.1	廻間Ⅰ式期前半	△				
象鼻山5号墳	養老町	丘陵	方形	14.0	廻間Ⅰ式前半	△				
象鼻山6号墳	養老町	丘陵	方形	10.0	廻間Ⅰ式期					
象鼻山8号墳	養老町	丘陵	円形	18.4	廻間Ⅰ-1	△				
象鼻山9号墳	養老町	丘陵	方形	17.0～18.0	廻間Ⅰ式期					
象鼻山16号墳	養老町	丘陵	方形	15.0～18.2	廻間Ⅰ式期前半					
白石6号墳	揖斐川町	丘陵	前方後方形	40.0*	-					
白石5号墳	揖斐川町	丘陵	方形		-					
船来山76号墳(X)	本巣市	丘陵	前方後方形	30.0*	廻間Ⅱ～Ⅲ式期					
船来山67号墳(X)	本巣市	丘陵	方形	24.0×17.0						
船来山64号墳(Y)	本巣市	丘陵	前方後方形	22.0						
船来山4号墳(Y)	本巣市	丘陵	方形	11.0						
船来山62号墳(Z)	本巣市	丘陵	前方後方形	45.0*						
船来山102号	本巣市	丘陵	方形	14.0						
船来山276号墳(A)	本巣市	丘陵	方形	10.0*		廻間Ⅱ式期	△	石槨	鉄剣1	
船来山278号墳(F)	本巣市	丘陵	方形?		廻間Ⅲ式期	○				
船来山262号墳(G)	本巣市	丘陵	円形?	16.0*	廻間Ⅲ式～松河Ⅰ式期	○				
船来山26号墳(G)	本巣市	丘陵	前方後円形	43.0*	廻間Ⅲ式～松河Ⅰ式期					
宗慶大塚古墳	本巣市	扇状地	前方後円形	63.0*	元屋敷中葉	○				
瑞龍寺山頂墳	岐阜市	丘陵	方形	35.0×26.0*	山中式期	×			長宜子孫銘内行花文鏡	
岩田東A遺跡 SZ5	岐阜市	低位段丘	前方後方形	28.0*	廻間Ⅱ後半～Ⅲ前半	○				
加佐美山1号墳	各務原市	丘陵	方形(前方後方?)	15.0*	山中式期	×				
蘇原東山1号墳	各務原市	丘陵	方形	12.0*	廻間Ⅰ式期	△		刀子		
古村遺跡 SZ03	美濃市	低位段丘	B1型	8.85	廻間Ⅱ式期	○				
古村遺跡 SZ10	美濃市	低位段丘	B1型	10.2	廻間Ⅱ式期	○				
美濃観音寺山古墳	美濃市	丘陵	前方後方形	21.0	廻間Ⅱ式期	×	掘込		方格規矩鏡1 重圍文鏡1	勾玉2、玉21
伊瀬栗地遺跡	美濃加茂市	丘陵	方形	10.0*	廻間Ⅰ式期	×	-	刃閔双孔鉄剣	多孔銅鏡2	
夕田茶臼山古墳	富加町	丘陵	前方後円形	39.5	廻間Ⅱ式前半	×	構築			
杉洞1号墳	富加町	丘陵	突出部付円形墳	30.0*	廻間Ⅰ式後半	×	構築			
蓮野1号墳	富加町	丘陵	突出部付円形墳	28.0*	廻間Ⅰ式前半	×				
神崎山遺跡	可見市	丘陵	-	10.0*	山中式期					石棺(石包丁再加工)
上野桐野1号	可見市	丘陵	円形	18.3	廻間Ⅰ式後半	×	掘込	鉄剣		ガラス玉
上野山神	可見市	丘陵	円形	10.0*	廻間Ⅰ式後半	×	掘込			
西寺山古墳	可見市	中段段丘	前方後方形	60.0*	廻間Ⅲ式後半	×			三角縁三神五獸鏡(伝)	
高倉山古墳	御嵩町	丘陵	前方後方形	41.5	廻間Ⅲ式前半?	×				
東寺山1号墳	御嵩町	丘陵	前方後方形	41.0*	廻間Ⅲ式後半	×		鉄刀1	仿製二神二獸鏡、銅鏃	勾玉1
東寺山2号墳	御嵩町	丘陵	前方後方形	58.0	廻間Ⅲ式後半	×				
金ヶ崎遺跡 SX01	御嵩町	丘陵	前方後方形	30.0*	廻間Ⅱ式期	○				
金ヶ崎遺跡 SX02	御嵩町	丘陵	方形	17.2×18.7	廻間Ⅱ後半～Ⅲ前半	○	掘込	鉄剣		
金ヶ崎遺跡 SX03	御嵩町	丘陵	方形	18.7×17.2	廻間Ⅰ-4	○	構築			
金ヶ崎遺跡 SX05	御嵩町	丘陵	方形	11.0×11.6	廻間Ⅱ式期	○	構築		銅鏃2、多孔銅鏃1	勾玉、管玉
金ヶ崎遺跡 SX09	御嵩町	丘陵	方形	9.9×10.4	廻間Ⅱ式前半	○	-			

\*は復元長、現存長など全容の不確定なもの

表 2-4 美濃における古墳出現期の墳墓

意が必要であるが、現段階での類型を整理したものを表2-5に示した。組合せによって計6つの類型に分けられるが、A1a・B1a類は従来の一般的な方形周溝墓群が該当し、首長墓はそれ以外の類型に現れてくる。

立地		構成		墳形		弥生時代後期後葉～終末	古墳時代前期前半
A	平地	1	群	a	単一	※低地の方形周溝墓群	
				b	多様	東町田墳墓群	前波古墳群・上磯古墳群
		2	単			宗慶大塚	
B	丘陵	1	群	a	単一	※丘陵の方形周溝墓群	
				b	多様	象鼻山古墳群・金ヶ崎墳墓群・船来山古墳群・白石古墳群	
		2	単		瑞龍寺山頂墳・加佐美山1・蘇原東山1・観音寺山・蓮野1・杉洞1・伊瀬栗地・上野桐野・上野山神	夕田茶臼山古墳 高倉山古墳	

表2-5 墳墓の属性分類

A類全般は美濃西部に分布する傾向があり、特にA1b類が特徴だろう。円形墳・方形墳・方形周溝墓・前方後方墳が存在する東町田墳墓群が代表的である。象鼻山古墳群はB1bではあるが、立地が異なるものの墳形の多様性の面では共通する。こうした墳形選択の多様性はこの時期の美濃西部の特徴といえそうである。

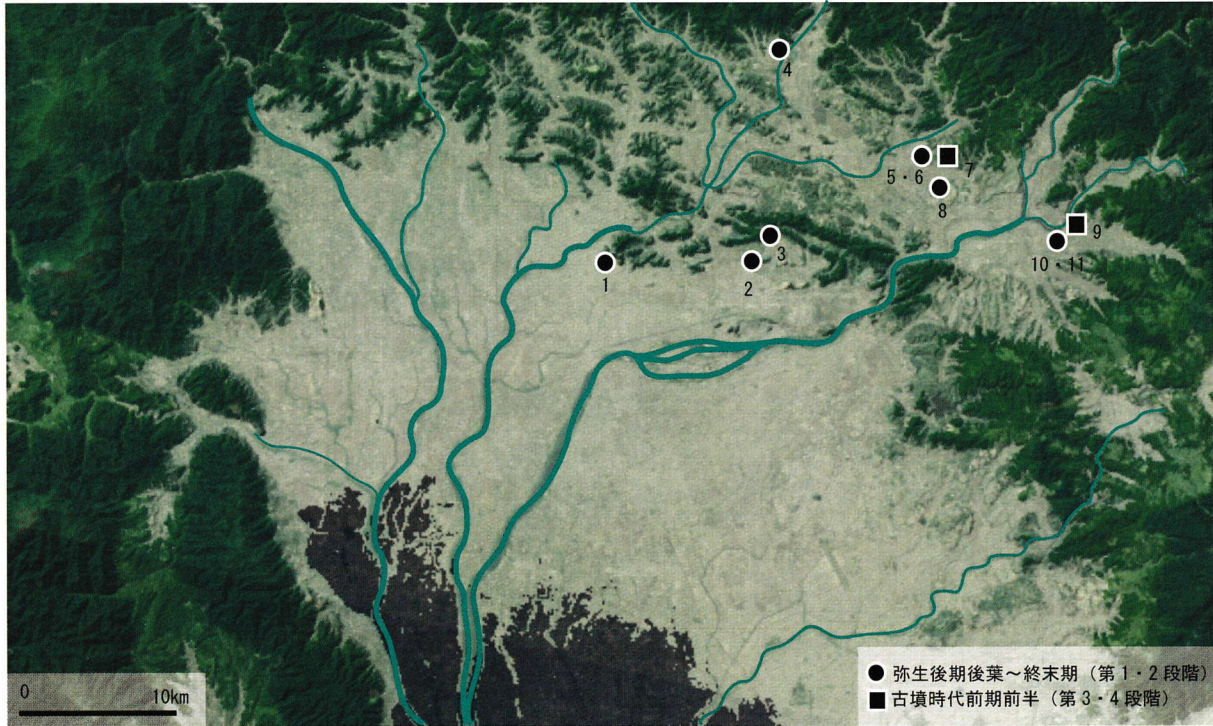
次に分布を検討してみると、弥生時代終末期の首長墓で最も多いのはB2類であり分布をみると美濃東部に偏在している〔図2-8〕。特に長良川と木曾川中流域に挟まれた中濃に分布の中心があり、当地域の特徴的な墓制のあり方と推測される。

さてB2類の墳墓で注目したいのは鉄器が出土する事例が散見され、特に短剣の副葬がみられる点である。当該期に鉄器を出土する墳墓を図2-9に示したが、美濃東部にやや偏在することが分かる。埋葬施設を調査した事例がそれほど多くないため、分布偏在が当時の状況を反映しているかは留意が必要だが少なくとも中濃の首長墓では鉄器の副葬が定着しつつあることは想定できそうである（註11）。そしてこうした中濃の首長層の勢力背景について鉄器の広域流通ネットワークとの繋がりをひとつの要因として想定しておきたい。

墳墓の類型から弥生時代終末期から古墳時代初頭のあり方は、概ね長良川を境に西と東で広域なまとまりを確認でき、西濃は東町田墳墓群などのように集団墓域を基本として墳形や規模で首長墓の差異を表出させるが、美濃東部は首長墳を集落や共同墓域から隔絶した場所に置く。これら2つの地域では首長層と共同体の関係に質的な差があり、それが墓制の原理に反映している可能性が推測される。隔絶した立地を選ぶ美濃東部のB2類（丘陵上独立墳）のあり方は、共同体内部の急速な階層分化の進行を想起させる。しかし、こうした階層分化の様相は有力首長層の安定化や強大化には進展しなかったことが、先述した円形墳の衰退や中濃盆地北西部勢力の衰退から読み取る事ができ、古墳時代前期前半以降はむしろ多様性を基調としていた西濃の勢力の階層化・安定化・強大化が進んでいく点は興味深い現象である。

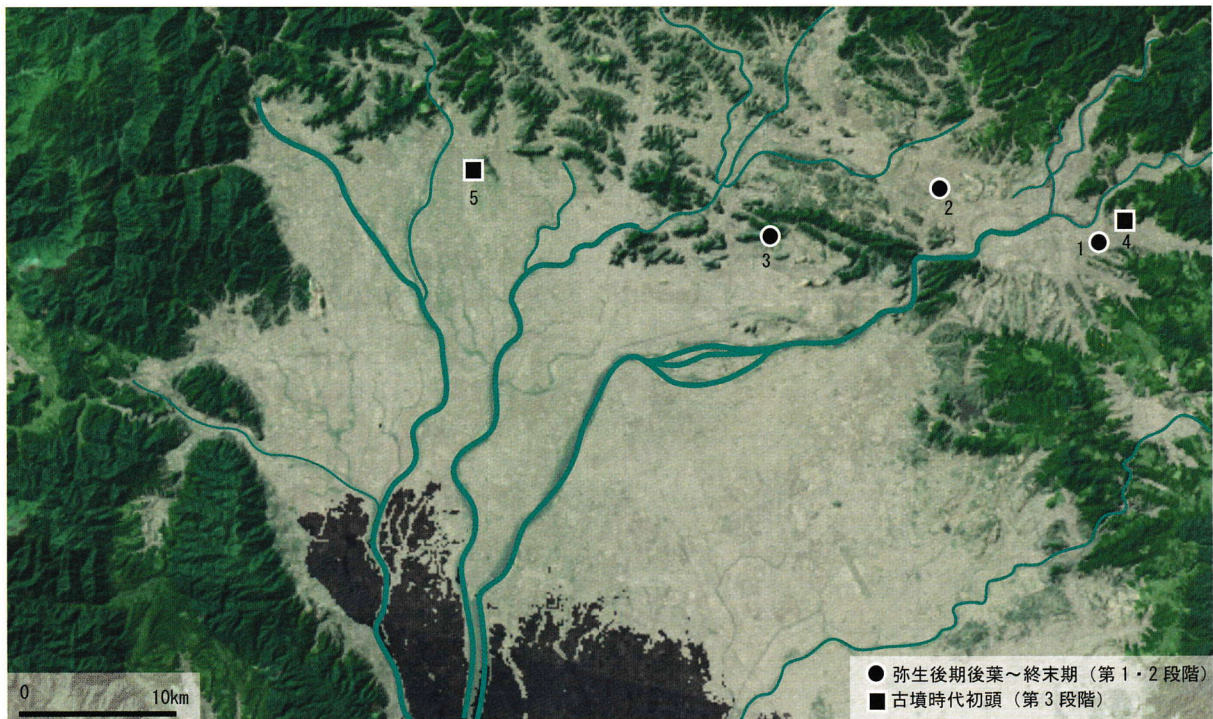
このような弥生時代後期社会の変化については集落と墓域の分析をおこなった恩田知美氏と藤田英博氏によってすでに指摘されている（註12）。こうした変化のあり方と共に、美濃東部は廻間I式期まで





1. 瑞龍寺山頂墳 2. 加佐美山1号墳 3. 蘇原東山1号墳 4. 美濃観音寺山古墳 5. 蓮野1号墳 6. 杉洞1号墳 7. 夕田茶臼山古墳  
8. 伊瀬粟地墳丘墓 9. 高倉山古墳 10. 上野山神弥生墳丘墓 11. 上野桐野弥生墳丘墓

図2-8 美濃の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半のB2類（丘陵上独立墳）の分布  
(地図は国土地理院地図の色別標高図より引用)



1. 上野桐野弥生墳丘墓 2. 伊瀬粟地墳丘墓 3. 蘇原東山1号墳 4. 金ヶ崎SZ01・02 5. 船来山276号墳

図2-9 弥生時代終末期～古墳時代初頭の鉄器出土墳墓の分布  
(地図は国土地理院地図の色別標高図より引用)

在地の条痕甕（櫛条痕）を使い続ける土器文化が根強く残る地域であり、台付甕を使用する濃尾平野低地部との土器様式における相違からひとつの文化圏として強いまとまりが認められるとの重要な指摘もある（石黒 1999・2018）。強い文化的なまとまりがある故に地域社会の変革がより階層分化や集落の機能分化を促進し、それが墓制に強く反映されたのかもしれない。その背景には弥生時代後期後半以降に活発化する地域間交流と大陸系広域文物の流通、手工業生産の変化、そして気候変動など複雑な要因が絡み合っている。全てを解きほぐす事は容易ではないが、その一端を考察してみたい。

### 3) 鉄器の流通と円形墳の成立について

中濃盆地の弥生時代終末期墳墓のなかでB 2類墳墓である伊瀬栗地遺跡、上野桐野1号弥生墳丘墓、金ヶ崎遺跡 SZ02で鉄器が出土しており、B 2類墳墓と鉄剣の親和性は高いと考えている。この中でも特に夕田墳墓群から南へ2kmほどにある伊瀬栗地墳丘墓から出土した刃関双孔鉄剣（斎藤 1994）に注目したい〔図2-10の2〕。鹿角製の装具が想定される鉄剣で、北部九州、丹後、北信、北関東、南関東での出土が多い〔図2-11〕。特に丹後地域では大風呂南墳墓を筆頭に刃関双孔鉄剣が多く副葬される。そして主たる流通経路は北陸を経由した日本海沿岸ルートから中部高地や北関東へ至るものと想定されているが、同時に北近畿から近江琵琶湖北東岸・東海を経て南関東へという鉄製品・鉄製武器の流通経路の存在も示唆されている（野島 2004・2009、豊島 2012、瀬川 2019）。繰り返しになるが、鉄剣副葬の定着がみられるB 2類墳墓の母体となる中濃盆地の地域社会あるいは共同体は鉄器の流通経路と関連している可能性が高く、共同体内の階層分化を進行させた有力な要因といえる（島田 2014）。

また、刃関双孔鉄剣は北信地域の箱清水土器様式圏内である篠ノ井聖川遺跡や根塚遺跡で円形墳に伴う形で一定量出土しており（註13）、円形墳と鉄剣・鉄釧などの鉄製品の出土を評価して鉄の広域流通網の中から北信や北関東の円形墳が成立するとの指摘もある（青木 2005）。美濃地域における円形墳導入の契機も鉄器流通経路との接触が考えられよう。

### 4) 内陸部への円形・前方後円形墳墓の拡散起点としての美濃

弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて列島では特に西日本を中心に墳墓の多様性があり、美濃における多様な状況もこうした当時の社会状況と同一の方向性にあるといえるが、強い方形志向を認める伊勢湾沿岸地域の中では美濃地域の多様性はやや異質である。その多様性のピークは弥生時代終末期から古墳時代初頭にあり、以降は急速に前方後方墳・前

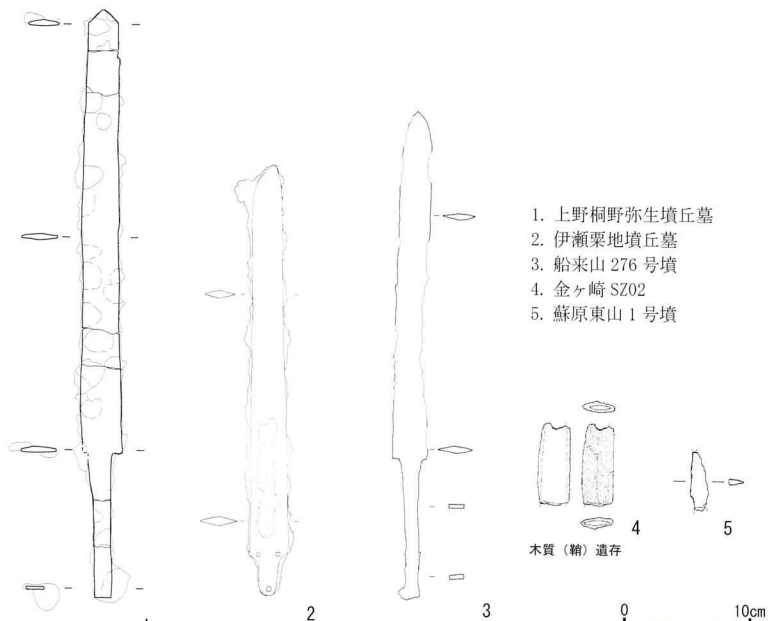


図2-10 弥生時代終末期から古墳時代初頭の墳墓出土鉄器（S = 1/6）

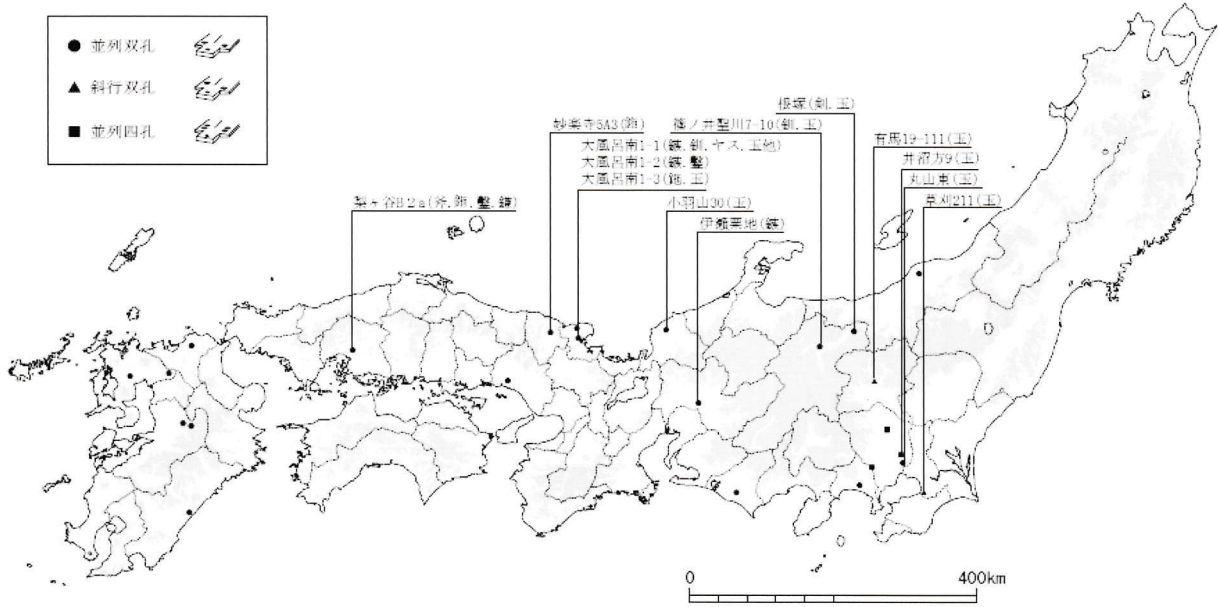


図 2-11 刃関双孔鉄剣の出土地 (野島 2004 より転載)

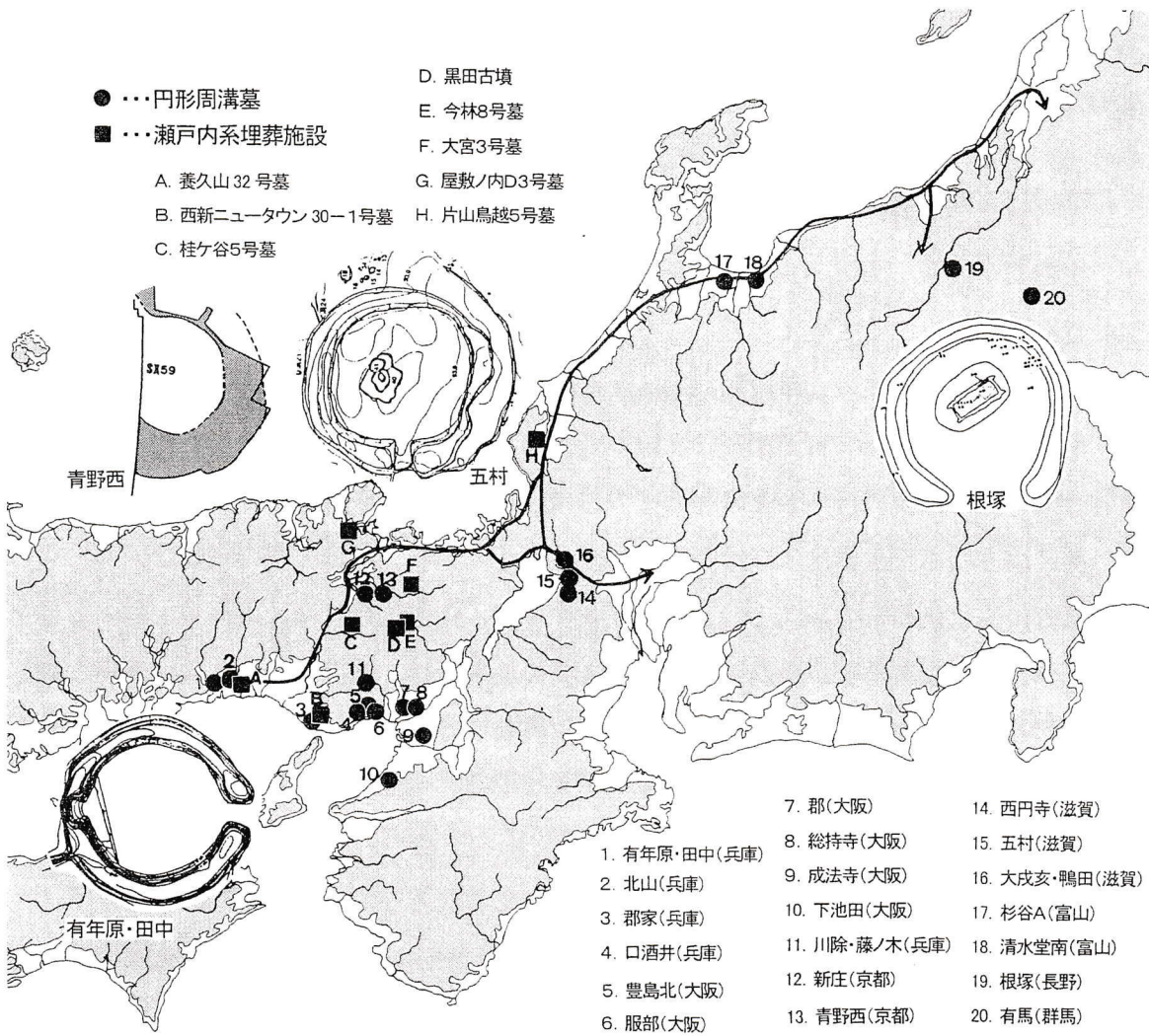


図 2-12 円形周溝墓と瀬戸内系埋葬施設の波及経路 (高野 2006 より転載)

方後円墳に収斂されて画一的となる。

特に特徴的なのは円形墓・円形墳（註14）の分布であり、弥生時代中期後葉（凹線文期）の荒尾南遺跡の事例が最も古い。濃尾平野における弥生時代墳墓の基本的形態は方形であり円形墳（突出部付円形墳を含む）は西からの外的要素と考えられる。おそらく地域間交流や広域流通を契機に美濃へ導入されたと考えられる。

円形墓・円形墳について少し整理しておく、弥生時代前期に岡山県や香川県などの備讃瀬戸内地域において定着した円形周溝墓が中期以降に播磨地域に広がり、終末期（庄内式期）には播磨・摂津地域を中心に北近畿や琵琶湖沿岸、河内、大和など東へ拡散する傾向が明らかにされている（近澤1995、岸本2001）。美濃地域で円形墓が長期に渡り連続して築かれる例は希であり主体となることはないが、前述のように少なからず弥生時代終末期の墓制に影響を与えている。活発な広域流通や地域間交流が想定され、後述する夕田墳墓群における突出部付円形墳や夕田茶臼山古墳のような出現期前方後円墳誕生の背景もこうした動向と関連していると考えられる。

次に、瀬戸内から南関東までの範囲での円形墓及び突出部付円形墳の分布に注目し、弥生時代終末期～古墳時代前期前半の各地の墳墓を図2-13に整理した。およそ本章における美濃地域の第1～3段階に該当するものを並列したものである。

突出部付円形墳では双方中円形の楯築弥生墳丘墓が著名であるが、播磨地域においても弥生時代後期中葉に有年原田中1号墳のように突出部を付す事例が確認されており、さらに弥生時代終末期（庄内式期）には滋賀県長浜市の五村遺跡や大戊亥・鴨田遺跡など琵琶湖東岸地域でも認められるようになる。近年は大和盆地においても瀬田遺跡SZ4500のように庄内式期古相段階の前方後円形周溝墓が確認されており（森川2017、森川・山本2017）、円形墳と同様に弥生時代終末期が拡散期と考えられる。

次に円形墳の拡散契機についてであるが、高野陽子氏は京都府北部の資料分析から弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて、北丹波の綾部市新庄遺跡の円形周溝墓群や青野西遺跡の突出部をもつ円形周溝墓などのように吉備や播磨など瀬戸内東部を中心とする円形原理の思想が入り、鉄器の流通により活発化した北近畿を経由する東西のルート上に広がると推測し、瀬戸内東部との交流の中で北近畿周辺において円形墳の原理と日本海沿岸部の鉄製品流通経路が接触していると評価している（高野2006）。高野氏が推測したこの鉄器流通経路は、近江の琵琶湖北東岸地域にまで延びて美濃地域と接触している。湖東・湖北と美濃の密接な関係は土器の分析からも明らかにされており（小野木1996、石黒1999、藤田2013）蓋然性は高い。

さらに当該期の大型円形墳や突出部あるいは陸橋を付す円形墳の分布を図2-14に示した。拡散は北関東や北信地域にも及ぶことは周知のとおりであり、瀬戸内東部を発信源として西から東への拡散経路が存在する。そして美濃地域あるいは夕田墳墓群はその中間地点にあたり、分布をみる限り西と東をつなぐ重要な経路上にある。

近年は飛騨地域においても上切寺尾墳墓群にて弥生時代終末期の丘陵上立地の円形墳が確認されており（註15）、日本海側へ抜けた越中では富山市において杉谷A遺跡円形墳や百塚遺跡SZ9・11、清水堂南遺跡などで円形周溝墓が存在する。さらに百塚住吉遺跡においては古墳時代初頭の前方後円形周溝墓も確認されており中濃地域の状況と類似していて非常に興味深い。

ところで富加町の東山浦遺跡では弥生時代中期後葉の信州系の土器が出土しており、この段階です

時期・段階	美濃	近江・越前・北近畿	備前瀬戸内 近畿	越中・関東甲信
200 弥生時代終末期	第1段階 瑞龍寺山頂墳 ○象鼻山3 加佐美山1 神崎山 蘇原東山1 ○象鼻山8 ○蓮野1号 伊瀬粟地	小羽山30号 ○五村	○楯築 ○有年原田中1 ○萩原1 ○瀬田 SZ4500	○根塚 ○杉谷A・清水堂南
	第2段階 ○東町田 SZ27・28 ○杉洞1号 ○上野桐野 ○上野山神 金ヶ崎 SX03 ■美濃観音寺山 金ヶ崎 SX09	○大成亥 赤坂今井 ○青野西 鴨田 ○白米山北 原目山 風巻4号 ●園部黒田	○西条52 ●矢藤治山 ●纏向石塚 ●宮山	○百塚住吉 ○篠ノ井 有馬 ■高部30・32
250 古墳時代前期初頭・前半	第3段階 ■東町田 SZ10 ●夕田茶臼山古墳 ■金ヶ崎 SX01 船来山276号 金ヶ崎 SX02 ■東町田 SZ02 ■岩田東A SZ5 ■高倉山古墳	■小松古墳 大田南2 ■神郷亀塚 大田南5	●鶴尾神社4 ●ホケノ山 ●養久山1	●百塚住吉 SZ01・04 ●神門3・4・5 ●秋葉山3 ○円形・突出部付円形墳 ●前方後円 ■前方後方

図2-13 弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の美濃の墳墓編年と各地の対応表

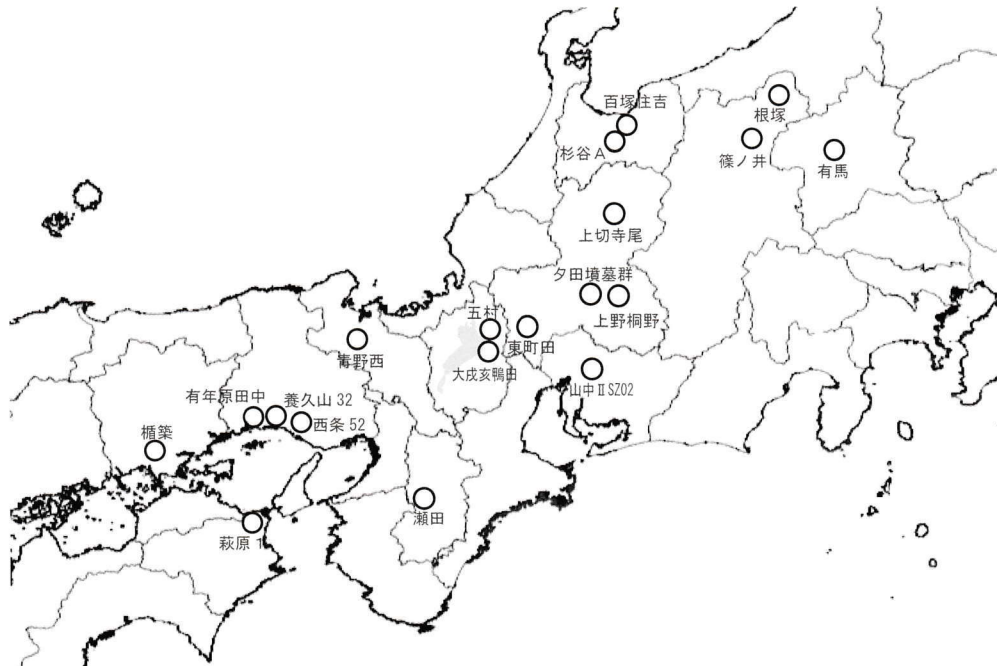


図2-14 弥生時代後期後半～終末期（1・2段階）の大型円形墳・突出部付円形墳の分布

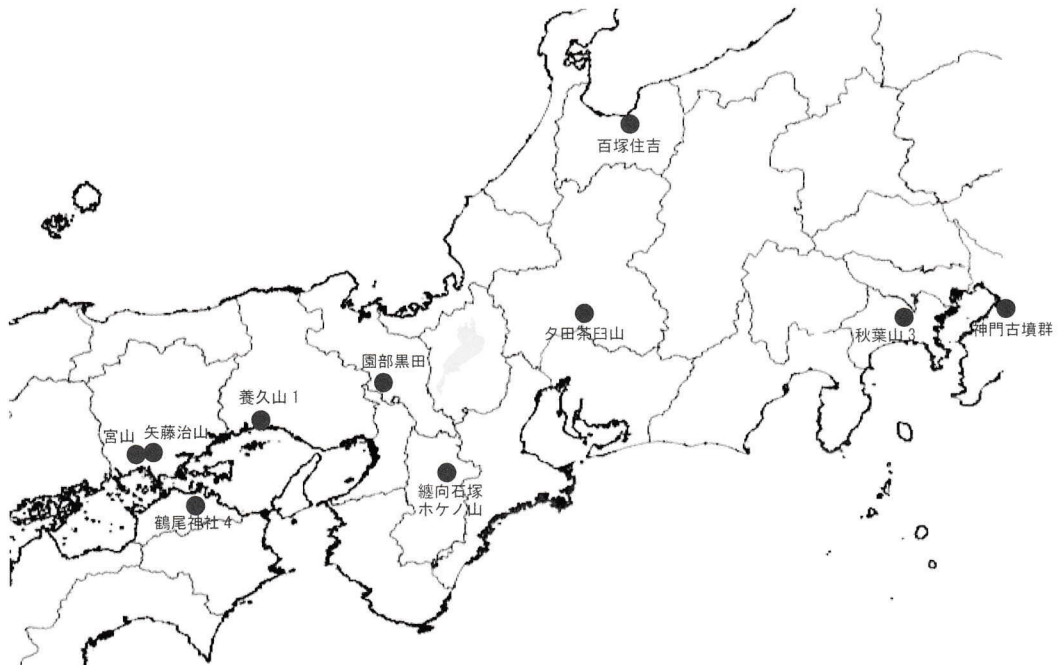


図2-15 弥生時代終末期～古墳時代初頭（2・3段階）の主な前方後円形墳墓の分布

に飛驒を経由した交流が想定されている。弥生時代後期以降に中濃・東濃で多数出土する有肩扇状石器や打製石斧とされる打製石器農耕具は南信州との交流や影響が示唆されており、石黒立人氏は中濃盆地を含む広義の「内陸回廊」と飛驒や信州を結ぶルートが存在を示唆している（石黒 2018）。中濃盆地は濃尾平野と飛驒山塊地をつなぐ結節点であり、両地域の往還経路が通史的にここを経由するのは地勢的な必然であり、中濃盆地を経由した両地域の交流は想定されて然るべきであろう。

越中・北信地域・北関東への円形墳の流入は鉄器の出土状況と照らして日本海沿岸ルートが有力視されるが、越前や加賀・能登地域においては貼石のない独自の四隅突出型墳丘墓の分布中心であり終末期には台状墓の分布領域である。円形墳が顕著でない点には留意が必要だろう。飛驒や越中そして北信地域の円形墳について中濃盆地と単純に結びつけることは難しいものの（註16）、美濃飛驒往還経路も有力な候補のひとつとして想定をしておきたい（註17）。

このように夕田墳墓群をはじめとする円形を指向する墳墓の導入や、中濃盆地における首長墓の展開と鉄製武器の副葬からみる階層化の進展、中濃盆地における集落の拡散などの異なる位相は決して無関係ではなく、鉄器流通経路の進展を背景として地域集団間に起こった新たな紐帯の創出を下敷きとしていた可能性が想定されよう。そして夕田墳墓群は鉄器流通経路を背景とする円形墳（突出部付円形墳を含む）の西と東を結ぶ経路の中継点、あるいは東方への展開と内陸部への浸透を示す重要な事例と評価し、さらに古墳時代初頭にかけての出現期前方後円墳の分布は前段階の円形墳の東西経路を踏襲しており夕田茶臼山古墳が内陸部への起点であった可能性が想定されるのである〔図2-15〕。

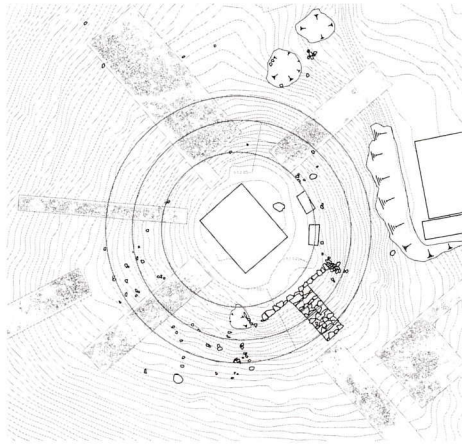
このように円形墓流入や厚葬墓の出現による階層分化進展の要因を鉄製武器あるいは鉄器の流入経路との接触に求めたが、当該期の美濃地域において鉄器や鉄素材の出土例は多くない。弥生時代中期以降に北部九州との強い結びつきで日本海沿岸の鉄器文化が著しく進展する実態が明らかになっている（村上 2000）。東海地方は琵琶湖北東岸地域を介した流通ネットワークとの接触の中で素材や製品を獲得し、美濃地域においては後期にかけて磨製石斧の減少と木製品への鉄器加工痕の増加から当該期に工具の鉄器化が始まるとされる（小野木 2017）。今後は鉄器の普及や鉄器化の実態把握が課題であり、それが墳墓とどう関連するのかを考えていきたい。そのためには墳墓だけでなく集落遺跡の分析を並行して進めていく必要がある。

## 6 夕田茶臼山古墳の系譜について

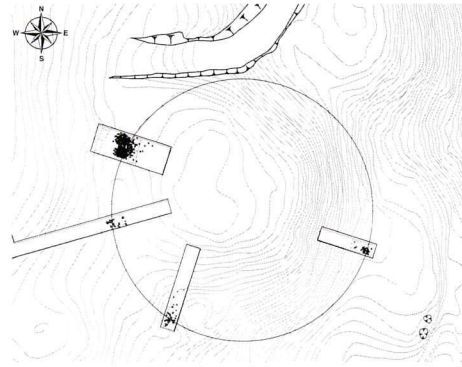
次に夕田茶臼山古墳の前方後円形の系譜について埋葬主体部や副葬品の情報がない中で十分な判断は困難であるが、若干の考察を加えておきたい。

前方後円形の墳墓は、概ね庄内式古相には瀬戸内東部で成立し列島規模で拡散するとされるが、周溝墓系、積石塚系、盛土築造による墳丘墓系やこれら諸要素の複合などによっていくつかの地域様相が認められる。夕田茶臼山古墳は丘陵の一部を削平し盛土にて墳丘を構築する墳丘墓系であり、この観点から類例を示すとすれば庄内式新段階とされる京都府南丹波地域の園部黒田古墳に注目したい。

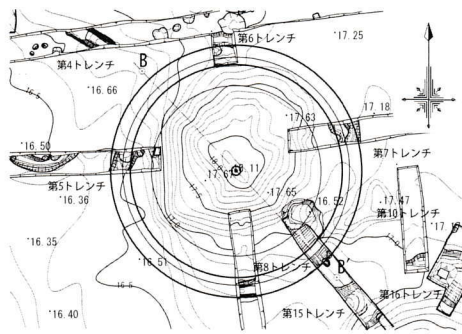
園部黒田古墳は全長 52 m で前方部が撥型に開く前方後円墳であり、墳形は左右非対称で出現期特有の特徴を有す。埋葬施設は木槨である。立地は丘陵端部で後円部が不整形な楕円形を呈している点は夕田茶臼山古墳とよく類似している。墳丘の構築法は地山の丘陵頂上部をほぼ平坦に削平し、その上に 1



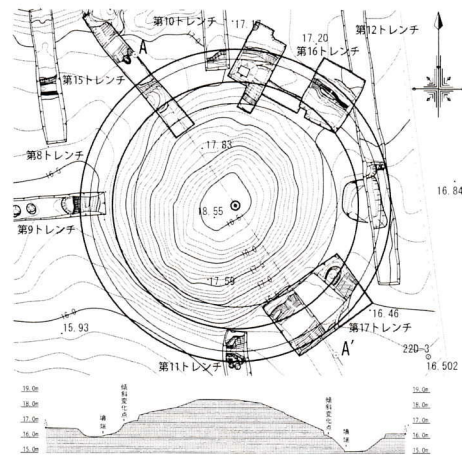
象鼻山3号墳（養老町）



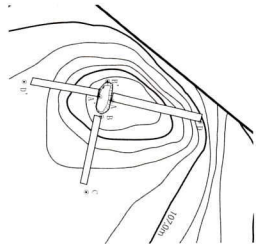
象鼻山8号墳（養老町）



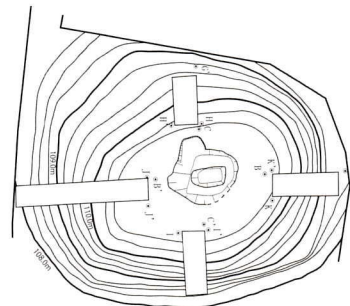
東町田 SZ28（大垣市）



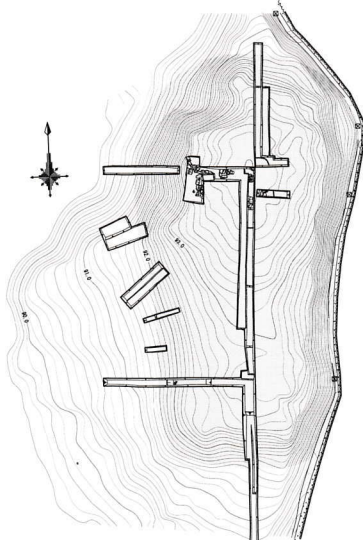
東町田 SZ27（大垣市）



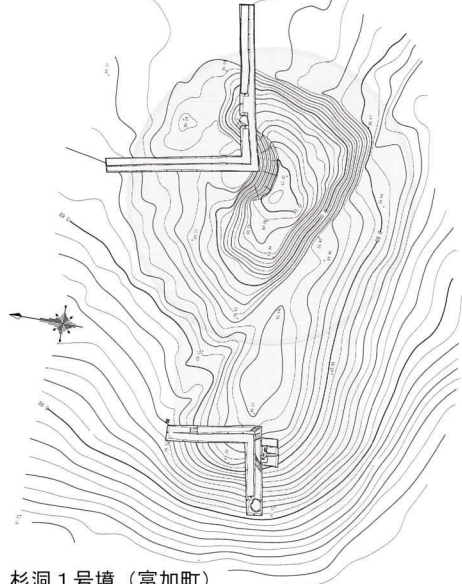
上野山神弥生墳丘墓（可児市）



上野桐野1号弥生墳丘墓（可児市）



蓮野1号墳（富加町）



杉洞1号墳（富加町）



図2-16 美濃の円形墳及び突出部付円形墳 (S = 1/500)

m程度の盛土を造成するもので、墳丘のおよそ2/3は丘陵地形を利用している。規模を大きく見せる視覚効果を考慮したものであり、こうした墳丘構築法は夕田茶白山古墳でも確認されており共通点として挙げられる。

次に築造企画を検討してみる。出現期の前方後円墳については寺澤薫氏が庄内3式期から布留0式期に大和盆地東南部で誕生した纏向石塚古墳などの初期前方後円墳が地方へ波及したとし、これらを「纏向型前方後円墳」と名付けた(寺澤1998、2011)。纏向型前方後円墳は後円部径に対する前方部長の比が2:1(方/円比率0.5)となり前方部の短い墳形が特徴とされる。これに対し、鶴尾神社4号墳や萩原1号墳墓など備讃瀬戸内地域の出現期前方後円墳は5:4(方/円比率0.8)と前方部が長い点の特徴である(北條1999)。また那珂八幡古墳など北部九州の初期前方後円墳においても8:5(方/円比率0.625)程度が多く、やや前方部が長い傾向がみられる(福岡市2020)。

翻って夕田茶白山古墳をみると全長39.5m、後円部径24.5m、前方部長15mを計り、後円部径と前方部長の比はおよそ5:3(方/円比率0.61)で纏向型前方後円墳の類型より前方部がやや長い。比率でみれば北部九州の数値に近いといえる。先述した園部黒田古墳の場合は後円部径32m、前方部長22mを計り、およそ3:2(方/円比率0.68)となり夕田茶白山古墳と近い数値で前方部が長い。

園部黒田古墳の中心埋葬施設は礫床を有する木槨で木棺は舟底状とされる。同時期での礫床の事例としては岡山県の黒宮大塚墳丘墓、立坂墳丘墓、金敷寺裏山墳丘墓などが挙げられ瀬戸内地域で多くみられる。また福井県の片山鳥越5号墓でも礫を多用する埋葬施設がみられ、北陸地域にも影響が及んでいる(森本2010)。弥生時代後期以降で埋葬施設に石材を多用する地域は主として瀬戸内海沿岸地域であり、後期後半から終末期にかけて顕在化し山陰や北陸地域にまで影響がみられる(註18)。園部黒田古墳の中心埋葬施設も瀬戸内海沿岸地域の影響を受けており、こうした石材を多用する埋葬施設も鉄器の流通経路とともに東へ広がっている可能性が指摘される(高野2006、森本2010)。このような園部黒田古墳などの類似点から考えて、夕田茶白山古墳の系譜は大和盆地ではなく間接的ながら東瀬戸内方面との繋がりを考える方が鉄器の流通経路を背景とした円形墳及び突出部付円形墳の流入経路で繋がる点などを考慮して蓋然性が高いと考える。

## 7 弥生時代終末期の盛土によって墳丘を構築する墳墓について

夕田墳墓群の特徴のひとつは周溝を持たず盛土によって墳丘を高く構築し、それによって墳墓の内と外を区画する意図がみられることである。さらに丘陵上立地を選択することによって視覚効果を得ることができ、効果的に隔絶性をつくり出している。こうした特徴は蓮野1号墳の段階からみられ、墳墓の造営に係る労働力をコントロールした被葬者たる首長の共同体内での隔絶性を表象するものであったのだろう。一方で周囲を溝で区画しない特徴からは外との境界の厳密性が弱く、比較的開かれた墳墓と推測することができる。それは夕田墳墓群の墳形や墳裾の外形ラインが曖昧で明確に強く区画する意図を持たない点からも推測できる。

次に弥生時墳墓における盛土事例を整理してみよう。弥生時代の方形周溝墓には方台部に本来は低い墳丘が構築されていたと考えられるが後世に削平を受けて盛土の規模や構築法が不明なものが多数である。伊勢湾沿岸地域では名古屋市の平出町遺跡で弥生時代中期後半の方形周溝墓で50cm程度の盛土が



確認されている。多くが削平されている点を考えると、当時の方形周溝墓における盛土はおそらく 50 cm以下と想定され、美濃地域においても同様と推測する。

首長墓をみてみると、弥生時代中期には東大阪市の瓜生堂 2 号方形周溝墓が墳丘比高 1.3 m 盛土厚 0.8 m、巨摩廃寺 3 号周溝墓では盛土厚 1.3 m を計る。中期後葉では加美 Y 1 号墓が著名であり 2.8 m の墳丘比高のうち 1.6 m を盛土で構築している。中期においても、有力首長層の墳墓には盛土によって墳丘を高く造る高塚の事例が認められる。

後期から終末期をみると、赤坂今井墳墓は地山削り出しと盛土を併用しており南西部分 5-4 トレンチにおいて最大 1.7 m の盛土が確認されている。楯築弥生墳丘墓や養久山 1 号墳においても同様で最大 1.5 m の盛土が認められる。北陸地域では福井市の小羽山 30 号墓で 0.8 m、続く 26 号墓で 1.0 m を（青木 2010）、金沢市の七ツ塚遺跡では台状墓である 1 号墓で 2.5 m、11 号墓で 1.2 m の盛土が確認されている。

伊勢湾沿岸地域においては三重県明和町の織糸遺跡の方形周溝墓 SX07 や豊橋市の浪ノ上 1 号墳において 1.0 m を超える盛土が確認されており、関東では埼玉県坂戸市の中耕遺跡の方形周溝墓 SR21 において 1.4 m の盛土が確認されており、墳丘構築法の復元が試みられている（杉崎 2004）。

瀬戸内海沿岸地域にやや多く、北近畿、北陸地域のような台状墓がみられる地域においても特に有力な王墓では切土と盛土を併用して高塚を構築するようである。伊勢湾沿岸や関東でも終末期以降に盛土事例が散見されるようになり、特に有力な首長層は墳丘を高くするため多くの盛土を用いる。また盛土の量や高さは首長墓の外観における威厳効果とともに、埋葬施設の構造の変化とも関連する。後期後半以降には木槨墓や石槨が登場することとも関連し、弥生時代終末期以降は盛土事例が増えるのではないだろうか。

さて美濃地域の首長墓の様相をみてみよう。弥生時代後期後半から盛土によって墳丘を高く構築する墳丘墓が美濃地域に出現し終末期に顕著となる〔表 2-6〕。当該期の墳丘比高の平均値は 2.2 m で盛土厚は 1.4 m となり、墳丘の高さが人の背丈を超えるものを志向するようになり、盛土厚が増加するよう

No.	遺跡名	所在地	墳形	規模	主丘部高		時期	参考文献
					墳丘比高	盛土厚		
1	蓮野 1 号墳	富加町	突出部付円形墳	28.0	1.6	1.6	廻間 I 式前半	富加町教育委員会 2019
2	杉洞 1 号墳	富加町	突出部付円形墳	30.0	1.7	1.7	廻間 I 式後半	富加町教育委員会 2019
3	夕田茶臼山古墳	富加町	前方後円墳	39.5	5.1	1.9	廻間 II 式	富加町教育委員会 2014
4	上野桐野 1	可児市	円形	18.3	2.6	2.5	廻間 I 式	可児市教育委員会 2012
5	上野山神	可児市	円形	10.0	1.2	1.1	廻間 I 式	可児市教育委員会 2012
6	金ヶ崎 SX01	御嵩町	前方後方形	30.0	3.6	0.6	廻間 II 式	岐阜県文化財保護センター 2003
7	金ヶ崎 SX02	御嵩町	方形周溝墓	18.7 × 17.2	1.7	1.0	廻間 II 式	岐阜県文化財保護センター 2003
8	金ヶ崎 SX03	御嵩町	方形周溝墓	11.6 × 11.0	1.7	0.5	廻間 I 式	岐阜県文化財保護センター 2003
9	金ヶ崎 SX05	御嵩町	方形周溝墓	9.8 × 8.9	2.0	0.4	廻間 II 式	岐阜県文化財保護センター 2003
11	荒尾南 SZc40	大垣市	方形周溝墓	9.0	1.6	1.6	廻間 I 式	岐阜県文化財保護センター 2014
12	東町田 SZ27	大垣市	円形墳	17.6	3.4	1.3	廻間 I 式	大垣市教育委員会 2016
13	東町田 SZ28	大垣市	円形墳	14.0	2.3	1.1	廻間 I 式	大垣市教育委員会 2016
14	象鼻山 3 号墳	養老町	円形墳	10.1	2.3	1.0	山中 II 式	養老町教育委員会 2010
15	象鼻山 8 号墳	養老町	円形墳	18.4	3.9	2.0	廻間 I 式前半	養老町教育委員会 2010

表 2-6 美濃の盛土による高塚系墳丘墓

ある。古墳時代初頭には墳丘比高の平均値は3.1 mで高さを志向するが、盛土厚の平均値は1.0 mであり夕田茶臼山古墳のように丘陵地形を利用していくようである。

そして興味深いのは弥生時代後期後半から終末期において盛土厚が1.0 mを超える事例9例のうち8例が円形墳という点である。つまり円形墳は盛土による高塚を指向していると考えられ、円形墓の流入と高塚の指向に相関関係が認められよう。鉄器流通と円形墓の流入が契機となって美濃では円形墳と盛土による高塚への指向が成立し当該地域の特徴的な地域性を形成したと推測されよう。

## 8 まとめ

弥生時代後期以降の地域社会の揺籃は、中濃地域において後期後半に顕著となる盆地北西部への集落の拡散・展開という形で現れ、そこからは地域の紐帯の新たな創出や集落の機能分化が想定されるが、夕田墳墓群の築造がこうした動向と密接に変わっていると考えた。中濃盆地の集落と墳墓の動向は連動しており、ひとつの領域として一体性が認められ、夕田墳墓群の被葬者が中濃盆地の地域的なまとまりを背景として成立した首長層であると考えられる。さらに立地から盆地北西部への集落展開を主導した首長層の墳墓という理解を付しておきたい。

中濃盆地での丘陵上独立墳墓の展開や鉄器を副葬する墳墓の分布から弥生時代終末期に地域社会の階層分化とそれによる有力首長層の析出がかなり進んだと考えられる。背景には漢鏡などの青銅製品の流入や琵琶湖北東岸地域を介した日本海沿岸の鉄器流通経路との接触を想定できるが、それによって地域集団の新たな紐帯の創出が集落動向や新たな墳墓築造への原動力となったとも考えられる。

そして終末期に顕著になる円形墳への指向も同様の大陸系広域流通文物のネットワークを通じて流入している可能性を考えた(註19)。さらに夕田墳墓群が、鉄器流通経路を背景とする円形墳(突出部付円形墳を含む)の東西経路における中継点の可能性を示唆し、東方への展開と内陸部への浸透を考える上で重要な事例と評価した。そして古墳時代初頭にかけて出現・展開する初期前方後円墳についても弥生時代終末期の円形墳の東西経路を踏襲しており、夕田茶臼山古墳が内陸部への起点であった可能性を想定する。以上を夕田墳墓群の歴史的価値として提示する。

### 註

- 1 石黒立人氏は考古資料から導き出せる独自の文化圏として土岐川中流域の多治見盆地も含めて「内陸回廊」と呼称した。石黒立人2018「2、3世紀における地域社会と交流拠点を考えるために」考古学フォーラム
- 2 岐阜県教育委員会1981『半布里遺跡調査概報(1)』
- 3 富加町教育委員会1998『東山浦遺跡D地点発掘調査報告書』
- 4 富加町1980『富加町史 下巻通史編』56-58頁、富加町教育委員会2005『富加町詳細分布調査報告書』
- 5 岐阜県文化財保護センター2002『後平茶臼古墳・後平遺跡』
- 6 富加町1980『富加町史 下巻通史編』70-72頁
- 7 富加町教育委員会2005『富加町内遺跡発掘調査報告書』
- 8 前掲註4
- 9 本項及び図2-6は島田2018を基本としながら段階設定を一部見直して作成した。
- 10 夕田茶臼山古墳の基盤造成面から出土した炭化物をAMS年代測定した結果、1σ暦年代範囲がAD 211～255(47.1%)、2σ暦年代範囲がAD 137～258(79.1%)であった。考古学的に導き出された年代とAMS年代測定の結果に齟齬は少なく、上記AMS年代の新しいものをもって3世紀中葉とした。(富加町教育委員会2019)
- 11 西濃地域では当該期の墳丘墓の埋葬部の調査事例が少ない事や、平地立地が多く埋葬部が削平されている事が多い

- という調査の事情もある。事例増加によっては分布傾向が変わる可能性もある点には留意しておく必要がある。
- 12 本稿の第1段階に該当するV期後半～VI期前半に大きな画期があるされ、当該期に起きた大きな社会変化を読み取る（恩田2004、藤田2009）。
- 13 根塚遺跡の渦巻文裝飾付鉄剣をはじめ北一本柳遺跡（佐久市）H 33 住居出土の板状鉄斧、浅川端遺跡（長野市）の馬形帯鉤などの鉄製品の事例は、北信地域が日本海沿岸ルート of 安定した鉄器流通から舶載鉄器などの大陸系文物を獲得しているとされ（村上2000）ており、円形墳についても日本海ルートが想定されている。しかし根塚遺跡の円形墳丘墓については、年代を庄内式期とする見解や、出土鉄剣の副葬位置の特定が困難であり墳丘墓に伴わない可能性なども提示されており、評価が揺らいでいる。西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編2020『弥生時代の東西交流～広域的な連動性を考える』
- 14 弥生時代後期後半以降は墳丘墓などの盛土で墳丘を構築する墳墓や周溝墓においても盛土の構築事例が増えることから高塚指向が進むと考え、本稿においては盛土構築が認められるものについては円形墳の用語を使用する。
- 15 上切寺尾古墳群は弥生時代後期から古墳時代初頭に造られた51基の墳墓群である（岐阜県文化財保護センター2016）。丘陵上の立地で周溝と盛土で墳丘をつくり円形墳と方形墳が混在している。
- 16 北信地域は弥生時代後期後葉に円形墳が盛行し、庄内式期には方形墳へ転換するとされており（青木2005）美濃地域よりも先行する。
- 17 古代以降では美濃と飛騨・信州を結ぶルートは「飛騨支路」「飛騨路」とよばれ中濃盆地の西端で郡上街道から分岐し、圏域を東西に横断して飛騨川沿いに北上する。古代以降の飛騨への経路は中濃盆地を出発点とする飛騨街道が主となる点には留意しておきたい。
- 18 美濃地域においても廻間Ⅱ式段階の船来山276号墳が瀬戸内海沿岸地域的な石材を多用する埋葬施設の可能性がある（岐阜市教育委員会2007）。船来山276号墳では鉄剣（短剣）が出土している。
- 19 漢鏡の流入経路も鉄器と似た経路が想定できる。瑞龍寺山頂墳では長宜子孫銘内行花文鏡が美濃観音寺山古墳では流雲文方格規矩鏡と重圈文鏡が出土している。集落遺跡では砂行遺跡にて方格規矩鏡の破碎鏡片が、大杉遺跡では内行花文破碎鏡片が出土しており、流入経路については北近畿から北陸や湖北地域を経由した流入経路が想定されている（高木2012）。

#### 【主な引用・参考文献】

- 青木一男 2005 「円・方丘墓の様相—中部高地を中核に—」『東日本における古墳の出現』六一書房
- 青木敬 2010 「小羽山墳墓群の墳丘構築法」『小羽山墳墓群の研究 研究編』
- 赤塚次郎 1988 「東海の前方後円墳」『古代』第86号
- 赤塚次郎 1992 a 「東海系のトレース～3・4世紀の伊勢湾沿岸地域～」『古代文化』
- 赤塚次郎 1992 b 「瑞龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』第一集
- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1999 「土器からみた古墳時代初頭の地域類型—器種組成を指標に—」『門沼遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1988 「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点」『古代』第86号
- 石黒立人 2018 「2、3世紀における地域社会と交流拠点を考えるために」『2、3世紀の伊勢湾世界を探る』
- 岩本崇 2018 「古墳時代前期暦年代の試論」『前期古墳編年を再考する』中四国前方後円墳研究会
- 岩本崇 2020 「荒尾南遺跡の青銅器と古墳出現期前後の青銅器生産」『荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～』第34回考古学研究会東海例会資料集
- 宇野隆夫ほか 1999 『象鼻山1号墳—第3次発掘調査の成果』養老町教育委員会、富山大学人文学部考古学研究室
- 会下和宏 2015 「鉄剣・鉄刀」『墓制の展開にみる弥生社会』同成社
- 大賀克彦 2002 「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会
- 大賀克彦 2005 「前期古墳の時期区分」『東日本における古墳の出現』六一書房
- 岡寺 良 2005 「琴柱形石製品の型式学的研究」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任論集—』
- 小野木学 1996 「欠山式併行期の高坏からみた美濃の地域色」『土器・墓が語る』東海考古学フォーラム
- 小野木学 2017 「木製品からみた鉄器化の諸問題（岐阜県）」『木製品から見た鉄器化の諸問題』
- 恩田知美 2004a 「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『美濃の考古学』7号
- 恩田知美 2004b 「美濃地域のムラと墓」『山中式の成立と解体』東海考古学フォーラム三重大会
- 恩田知美 2017 『本巣市船来山古墳群総括報告書 本文編』本巣市教育委員会
- 岸本一宏 2001 「弥生時代の低円丘墳について」『兵庫県埋蔵文化財紀要』創刊号
- 久住猛男 2015 「「倭国の時代」の歴年代論」『新・奴国展』福岡市博物館

- 黒坂秀樹 2006 「近江の出現期古墳」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 斎藤基生 1994 「墳丘墓」『伊瀬栗地遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会
- 坂巻忠史 2005 「房総半島一市原・君津地域を中心に」『東日本における古墳の出現』六一書房
- 島田崇正 2014 「総括」『夕田茶臼山古墳範囲確認調査報告書』富加町教育委員会
- 島田崇正 2018 「美濃における古墳出現期の様相」『東海地方における古墳出現期の様相 2』考古学研究会東海例会
- 島田崇正 2019 「属性の整理と比較」『夕田墳墓群総括報告書 1』富加町教育委員会
- 杉崎茂樹 2001 「埼玉県坂戸市中耕第 21 号方形周溝墓の墳丘復元試論」研究紀要第 16 号、（財）埼玉県埋蔵文化財事業団
- 鈴木 元 2002 「美濃の弥生墓制」『美濃の考古学』第 5 号
- 鈴木 元 2004 「弥生時代終末～古墳時代初頭の様相」『東町田遺跡』大垣市教育委員会
- 高木宏和 1989 「第 V 章 結語」『宗慶大塚古墳周濠範囲確認調査概報』真正町教育委員会
- 高木宏和 2012 「総括」『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』美濃市教育委員会
- 高木宏和・藤田英博 2002 「美濃」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 高野陽子 2006 「出現期前方後円墳をめぐる二、三の問題—京都府黒田古墳の再評価—」『京都府埋蔵文化財論集第五集』（財）京都府埋蔵文化財センター
- 高野陽子 2012 「2、3 世紀のタニハと山陰」『邪馬台国時代のクニグニ資料集』香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」
- 田中幸生・中野秀昭 1998 「第 4 章第 1 節墳丘と墓壇の築造」『象鼻山 1 号墳 第 2 次発掘調査の成果』富山大学人文学部考古学研究室・養老町
- 近澤豊明 1995 「円形周溝墓について」『新庄遺跡』綾部市教育委員会
- 寺澤 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 寺澤 薫 2011 「前方後円墳出現論—纏向型前方後円墳再論—」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館
- 豊島直博 2010 「第 1 章 弥生時代の鉄製武器」『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
- 中井正幸 2001 「前期古墳から中期古墳へ」『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社
- 中井正幸 2005 「第 2 章第 2 節 前方後方墳の系譜」『東海古墳文化の研究』雄山閣
- 中井正幸 2017 「第 6 章 古墳群についての考察」『本巣市船来山古墳群総括報告書 本文編』
- 中島和哉 2010 「象鼻山古墳群における造墓の順序とその工程」『象鼻山古墳群発掘調査報告書—第 1～4 次発掘調査の成果』養老町教育委員会
- 成瀬正勝 2000a 「砂行遺跡における土器の地域色」『砂行遺跡 第 2 分冊』（財）岐阜県文化財保護センター
- 成瀬正勝 2000b 「砂行遺跡における住居形態と集落形態」『砂行遺跡 第 2 分冊』（財）岐阜県文化財保護センター
- 西島庸介 2007 「琴柱形石製品の研究」『考古学集刊第三号』明治大学考古学研究室
- 西村歩 2011 「土師器の編年③近畿」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 榎宜田佳男 2019 「石器からみた弥生社会と鉄器化の進展」『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社
- 野島 永 2004 「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐる」『河瀬正利先生退官記念論文集考古論集』
- 野島 永 2009 『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣
- 萩野繁春 1985 「瑞龍寺山山頂遺跡」『岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
- 林大智 2019 「木工具から読み解く木製品生産の実態」古代学研究 222
- 早野浩二 2011 「土師器の編年④東海」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 早野浩二 2018 「編年と併行関係の問題について」『東海地方における古墳出現期の様相 2』考古学研究会東海例会
- 樋上 昇 2020a 「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」『気候変動から読みなおす日本史 3 先史・古代の気候と社会変化』
- 樋上 昇 2020b 「荒尾南遺跡における鍛生産について—集落内分業のあり方をめぐって—」『考古学フォーラム』25
- 樋口吉文 1997 「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』同刊行会
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 畿内』山川出版社
- 福島孝行 2006 「丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る階層制と副葬品」『京都府埋蔵文化財論集第 5 集』（財）京都府埋蔵文化財センター
- 福本明 2007 「吉備の弥生大首長墓 楯築弥生墳丘墓」『遺跡を学ぶ 34』新泉社
- 藤田英博 2009 「岐阜県における弥生時代後期の社会の変化」『弥生時代後期の社会変化』
- 藤田英博 2013 「弥生終末から古墳前期の加飾土器群の検討」『弥生土器研究の可能性を探る』
- 古川登 2001 「北陸地方における弥生時代墓制の特質」古代文化 53-4
- 古川登・御獄貞義 2002 「越前地方における古墳時代—首長墓古墳の動向を中心に—」
- 北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集
- 北條芳隆 2000 「前方後円墳とヤマト政権」『古墳時代を見なおす』青木書店

- 丸山竜平 1998「古保利古墳群の基礎的研究—盟主墳の検討—」名古屋女子大学紀要 44  
 御獄貞義 2003「若狭地域における弥生時代の墓制」『続文化財学論集第二分冊』文化財学論集刊行会  
 村上恭通 2000「鉄器生産と社会変革—古墳時代の開始をめぐる諸前提—」『古墳時代を見なおす』青木書店  
 森川 実 2017「藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の調査」奈良文化財研究所紀要 2017  
 森川実・山本亮 2017「橿原市瀬田遺跡の調査—陸橋付き円形周溝墓を中心に—」近畿弥生の会第 20 回集会資料集  
 森本幹彦 2004「片山鳥越 5 号墓第 1 埋葬施設の位置付け—北陸弥生首長墓にみられる瀬戸内海沿岸地域的要素—」『片山鳥越墳墓群・片山真光寺跡塔址』清水町教育委員会  
 森本幹彦 2010「小羽山墳墓群出土弥生土器の編年と併行関係」『小羽山墳墓群の研究—研究編—』福井市郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会

### 【発掘調査報告書等】

- 赤穂市教育委員会 1991『有年原・田中遺跡』  
 赤穂市教育委員会 2014『有年牟礼・山田遺跡発掘調査報告書』  
 綾部市教育委員会 1989『青野西遺跡』  
 石川県教育委員会 1974『金沢市七ツ塚墳墓群』  
 揖保川町教育委員会 1985『養久山墳墓群』  
 海老名市教育委員会 2002『秋葉山古墳群第 1・2・3 号墳発掘調査報告書—第 5～9 次調査』  
 大垣市教育委員会 2012『大垣市埋蔵文化財調査概要』  
 大垣市教育委員会 2004『東町田遺跡』  
 大垣市教育委員会 2009『東町田遺跡Ⅱ』  
 大垣市教育委員会 2016『東町田遺跡Ⅲ』  
 (財)大阪文化財センター 1980『瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』  
 (財)大阪文化財センター 1981『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』  
 (公財)大阪市博物館協会大阪市文化財研究所 2015『加美遺跡発掘調査報告Ⅴ』  
 各務原市教育委員会 1990『加佐美山 1 号墳発掘調査報告書』  
 各務原市教育委員会 1999『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』  
 可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』  
 可児市教育委員会 1999『前波の三ツ塚』  
 可児市教育委員会 2012『山神古墳・桐野 1 号古墳—宅地造成に伴う発掘調査報告書—』  
 可児町教育委員会 1976『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』  
 木島平村教育委員会 2004『根塚遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 1993『尾崎遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2000『砂行遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2000『野笹遺跡Ⅰ』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2002『野笹遺跡Ⅱ・赤池 4 号古墳』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2002『南青柳遺跡・南青柳古墳・大平前遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2002『後平茶臼古墳・後平遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2003『深橋前遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2003『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2005『柿田遺跡』  
 (財)岐阜県文化財保護センター 2005『顔戸南遺跡』  
 岐阜県文化財保護センター 1997『牧野小山 C 地点発掘調査報告書』  
 岐阜県文化財保護センター 2003『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』  
 岐阜県文化財保護センター 2012『牧野小山遺跡』  
 岐阜県文化財保護センター 2014『荒尾南遺跡 C 地区 (第 2 分冊)』  
 岐阜県文化財保護センター 2015『東野遺跡Ⅱ』  
 岐阜県文化財保護センター 2016『上切寺尾古墳群現地見学会資料』  
 岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会 1973『牧野小山遺跡』  
 岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会 1979『今遺跡』  
 岐阜県教育委員会・可児町教育委員会 1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』  
 岐阜市教育委員会 1985『岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書 西山第 4・5 号墳 加納城本丸東南濠跡 瑞龍寺山山頂遺跡 上城田寺長屋第 1 号墳』  
 (公財)岐阜市教育文化振興事業団 2007『船来山古墳群』

- (公財) 岐阜市教育文化振興事業団 2012 『岩田東A・岩谷西遺跡』  
(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『中耕遺跡』  
園部町教育委員会 1991 『船坂・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』 園部町文化財調査報告書第8集  
清水町 2003 『風巻神山古墳群』 清水町埋蔵文化財報告書Ⅶ  
清水町 2004 『片山鳥越墳墓群 方山真光寺跡塔址』 清水町埋蔵文化財報告書Ⅷ  
真正町教育委員会 1989 『宗慶大塚古墳周濠範囲確認調査』  
関市教育委員会 1979 『重竹遺跡—その1—』  
関市教育委員会 2019 『関市市内遺跡発掘調査報告書 平成15～17年度』  
関市文化財保護センター 2019 『関市市内遺跡発掘調査報告書 平成28年度』  
高松市教育委員会 1983 『鶴尾神社4号墳調査報告書』  
桶築弥生墳丘墓発掘調査団 1987 『倉敷市桶築弥生墳丘墓第V次・第VI次発掘調査概要報告』  
富山市教育委員会 2009 『富山市百塚住吉遺跡B・百塚住吉B遺跡E・百塚遺跡発掘調査報告書』 富山市文化財埋蔵調査報告書32  
富山市教育委員会 2012 『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告46  
虎姫町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室 1997 『五村遺跡』  
豊橋市教育委員会 2010 『浪ノ上Ⅱ』  
能登川町教育委員会 2004 『神郷亀塚古墳』  
福井市立郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会 『小羽山墳墓群の研究』  
2010 『小羽山墳墓群の研究』  
福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課 2020 『那珂八幡古墳確認調査(那珂遺跡群第175次調査)現地説明会資料』  
三重県埋蔵文化財センター 2006 『織糸遺跡』  
美濃市教育委員会 2012 『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』  
美濃加茂市教育委員会 1994 『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』  
美濃加茂市教育委員会 1995 『為岡遺跡発掘調査報告書』  
美濃加茂市教育委員会 2003 『尾崎遺跡掘調査報告書』  
峰山町教育委員会 2004 『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』 峰山町埋蔵文化財報告書24  
本巣市教育委員会 2017 『本巣市船来山古墳群総括報告書』  
矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 1995 『矢藤治山弥生墳丘墓』  
弥栄町教育委員会 1991 『大田南古墳群』 弥栄町文化財報告第7集  
弥栄町教育委員会 1998 『大田南古墳群・大田南遺跡・矢田城跡第2次～第5次発掘調査報告書』 弥栄町文化財報告第15集  
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997 『象鼻山1号墳—第1次調査—』  
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1998 『象鼻山1号墳—第2次調査—』  
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1999 『象鼻山1号墳—第3次調査—』  
養老町教育委員会 2010 『象鼻山古墳群発掘調査報告書』

#### 【挿図出典】

- 図2-1 航空写真は国土地理院 USA-R2046-30 (S23米軍撮影) 一部改変  
図2-2 富加町都市計画図2020、航空写真は国土地理院 USA-R2046-30 (S23米軍撮影) 一部改変  
図2-3 岐阜県CS立体図  
図2-5 国土地理院地図 GSI Maps 色別標高図と全国最新写真シームレスの合成図を一部改変  
(<https://maps.gsi.go.jp/>)  
図2-7・8・9 国土地理院地図 GSI Maps 色別標高図と全国最新写真シームレスの合成図を一部改変  
(<https://maps.gsi.go.jp/>)  
図2-10 1. 可児市教育委員会 2012 図17 (22頁)、2. 美濃加茂市教育委員会 1994 第12図 (17頁)、3. (公財) 岐阜市教育文化振興事業団 2007 第17図 (24頁)、4. (財) 岐阜県文化財保護センター 2003 図81 (97頁)、5. 各務原市教育委員会 1999 図70 (208頁)  
図2-13 野島 2004 第4図 (5頁) 広島大学学術リポジトリより  
図2-14 高野 2006 第7図 (356頁)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ゆうだふんぼぐんそうかつほうこくしょ2 ぶんせきへん
書名	夕田墳墓群総括報告書2 分析編
副書名	
巻次	
シリーズ名	富加町文化財報告書
シリーズ番号	第30号
編著者名	島田崇正
編集機関	富加町教育委員会
所在地	〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田1511 TEL 0574-54-2177
発行年月日	西暦2021年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
				° , ' , ''	° , ' , ''			
夕田茶臼山古墳	岐阜県加茂郡 とみかちょうゆうだ 富加町夕田 あさみなみほら 字南洞地内	21502	4360	35度 29分 24秒	136度 59分 1秒	—	—	
杉洞1号墳	岐阜県加茂郡 とみかちょうゆうだ 富加町夕田 あさみなみほら 字杉洞地内	21502	4352	35度 48分 36秒	136度 98分 70秒	—	—	総括報告書
蓮野1・2号墳	岐阜県加茂郡 とみかちょうゆうだ 富加町夕田 あさほすの 字蓮野地内	21502	4356	35度 48分 36秒	136度 98分 70秒	—	—	

富加町文化財報告書 第30号  
夕田墳墓群総括報告書2 分析編

発行年 西暦2021年3月19日

発行者 岐阜県加茂郡富加町教育委員会

〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田1511

TEL 0574-54-2177 FAX 0574-54-2461

印刷 西濃印刷株式会社